ル 4
4692
3

吉澤文庫

摩耶名所巡覽圖會卷之二目録

山神社
西の里
明泉寺
寺社 八幡 観音御供不未社 村上焼窯
蓮の池 蓮の河
後の墓
的林 月松
尻池
忠度塚
渡の絶橋
まのゝ橋
白ひの梅
知章菱死園
敷賢忠死園
古井の池
盜人松
古井の細
松瓜 村雨 二人墓
八幡宮 鏡池
鷲尾向屋
護摩 鉢 紙
義經推木

兵庫より諸方約程

○上りの法
楠の碑へ 六丁
生田へ 北六丁
布引滝へ 一里余
菩提寺へ 三里
まやさんへ 二里半
ちうげへ 三里
あゝやへ 四里
西の宮へ 又里
尼ざきへ 七里
神崎へ 八里
大坂へ 十里
京へ 十九里余

○下りの法
和田岬へ 又丁
長田へ 北丁
須磨寺へ 一里半
一の谷 界川へ 二里
あゝへ 又里
三木へ 七里
姫路へ 十四里
○紀州路の方
むろへ 二十里
とも へ 又十里
宮島へ 九十里

聖霊權現

勝福寺

埴谷正直藏書之印

門ル号 號4692 卷3

早稲田大学図書館 昭和36.6.21 受 藏書

須磨
須広の浦 月上社
源氏ノ
舊の井
幻平塚
月月見の松
須広麓
茶田氏故家
幸代宮神祠
教政藥師
本堂 護広堂 猿寺堂 十王堂 馬頭観
二王門 義経腰掛け松 幻竿竹 若木橋
重衡松
須磨寺
芭蕉翁碑
惹雲院
光源氏旧跡
須広関屋 須広源氏 須広塩屋
一ノ谷 猿掛松 猿掛岩 仏山
安徳天皇行宮
道羅川
村上帝霊跡
熊谷平山一二ノ懸
二ノ谷
三ノ谷
梅ヶ鼻
塩屋
大五輪石塔
界川 摂州 播州
妹背ノ松
落地
奥畑伝右氏家
本蒙石
猿頭坂
大山寺
畜水
柱女塚
ヶ壺
烏滸
岩家
山田
多聞寺
八幡宮
稲荷神祠
休天神
人麻呂社
脇塚
両馬川
赤羽神社
妙見社
本松寺
明石
月の浦 月浜 月海 月濱 月駅 月門 月泊 月里
月川 月溪 月濱
月山
岩屋神社
若樂寺
平清盛石塔・明石入道ノ碑
狐塚
無量光寺
惣門
明石川
密蔵院
山王社
密蔵寺
藤沙碑
赤石
坂上寺
朝霧陶器
月見松
十論寺
日論寺
牛頭天王
皇子村
林村
技吉塚伝
大久保譯
大岡松

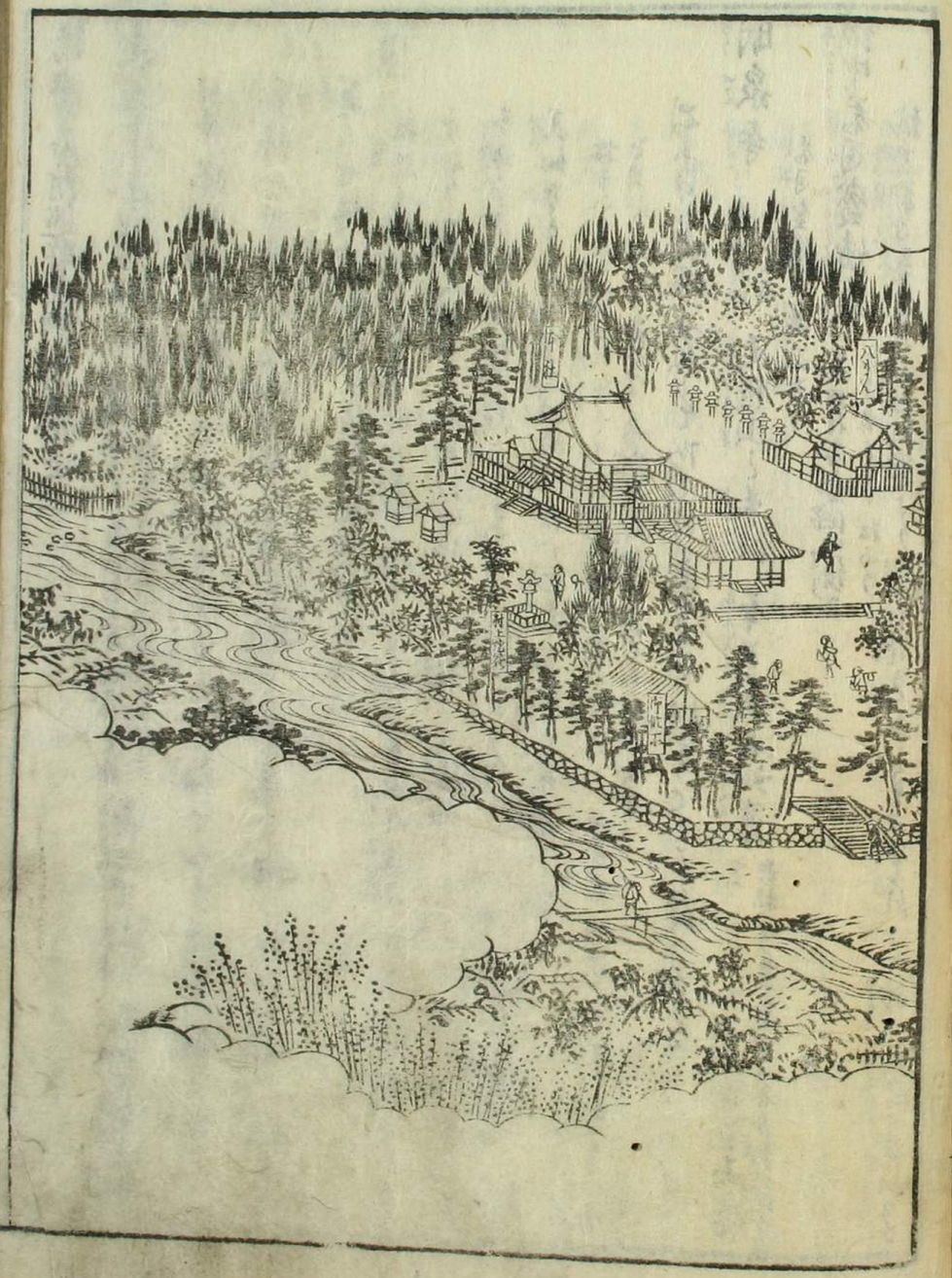
黒石明神　清水星　清水川　蓑江浦
江井が浦　魚住の泊　名寸隅新浦　魚住城趾
住吉神社　閼伽寺　如意寺
本堂　護摩堂　経書堂　三昧堂　岩幻堂　三重塔　鐘楼　山門
慶明寺　住吉神社　林崎の池　日輪寺　灰吹井　老室松
惣社　猶法輪寺　八幡宮　日輿社　榛谷城跡　伊川城趾
近江寺　社石護現　明王寺　雄子尾　雌子尾　性海寺
歯刻梅　神出城趾　地中清水　最明寺　時雨　灰吹井
清水寺　本堂　薬師堂　阿弥陀堂　二層塔　奥院　赤松氏墓　岩幻堂　三昧堂　鐘楼　飛嵯峨松
三神山古戦場
三神川
瀧野古城　瀧野　日川　鳴尾山　光明寺　光明寺陣所
引尾山

長田社 祭神幸代主命

攝社 二社

末社 四社

多居乃敷の小せの
百風の峯
石嶋翁の村上天皇
乃御寄附なり



長田神社 長田村にあり樹ふり垂松二丁許民家を經て本社まゐる其内にて例年六月十八日此宮村祭礼を長田里兵庫より北丁半西にこのり日本紀に長田の里と云へり

日本紀神功皇后記に云事代を命皇后に諭て心を長田の國に祭れと告給へりとあり 兼山嬢の分長嬢を召て先と祖しむ云 即二韓より還らせ給へ附のまうてせ田のゆゆしく

社記に云村上天皇長和三年七月十五日雨と長田の社に祈るに大雨降りぬ

ゆあり 墓人形を三ゆ余社の地くりの森より造出す赤屋地の邊不詳樂を奉ずるに地田村の濱にかの墓人形とさんぐゆ切捨るに是三韓退治の表徴なりとぞ又此附西濱広の荒田氏を富家と稱す

按ふに墓人像と切捨るゆ是蓋の祭の送ゆうえ 源氏物語須磨の巻にも人像と見へたりゆゆ久さうえ和泉式部六月祓ひゆゆ

ゆふゆうまつりそてひさの榊にさりてもとらへつるゆ

明泉寺 長田村の西国巡礼の第百四十番

天照山と号す 本尊大日如来 [illegible] 大伽藍なりしと寺歌の兵乱より荒廢す一谷合戦の時中

紙中荒田盛俊墓 長田村名倉池の傍の塚上にあり 松あり 紙中荒田盛俊は一谷の城軍より逃て逃るべきを見えず一人徒で逃合て戦ひ

が播取近辺六則綱と証並く引組ぐ馬より底堅俊は突へうと大刀の若ゆ是て

廿人力にて内力は六十人にて上下もゆる大私と一人して扱ひ乱れが七八十人力もみぐれば

近辺六の及ぶ所にあらず推付く首とを仲人とゆる小谷成景ゆれば又やよりも名

家と弱ゆうとそい旅歌ゆ出合さう仍りて彼が首を乞へばやとひ堅俊ゆ云申う

ち御辺則綱が命と助け以し給へ猛倉度ゆやて和及希ゆ親しき人とをゆゆ

ゆうとゆ熱しく云へ堅俊歌びてゆく戦ゆ男女の子ゆも二十余人拾さふらへ彼ホ

ゆうをゆくとゆ已く御恩みゆゆ中ゆゆ家ゆ治人とゆふ者は奥緑の水田ゆゆ有の

中の畔ゆみゆふ二人庭打ゆけて物語ゆゆ堅俊が御ゆと又とゆ左右のゆゆ

力とゆ生涯ゆゆ後の源田へ実例ゆ所ゆゆ

不武則綱上ゆゆて首と掻切る刀の先ゆ貫きゆく捧げ馬ゆゆて弛久ゆ

蓮乃池 長田の西の方ゆあり平家陣中の大ゆ人形基ゆの駒けゆ拓ゆ 巳百ゆ十歩ゆ一歩基ゆの駒

駒林松 駒林の氏造ゆ乃地名ゆう松ゆ有ゆ松村のゆ名ゆ 光源氏のゆの俗迹ゆ今二ゆの松ゆ有ゆ

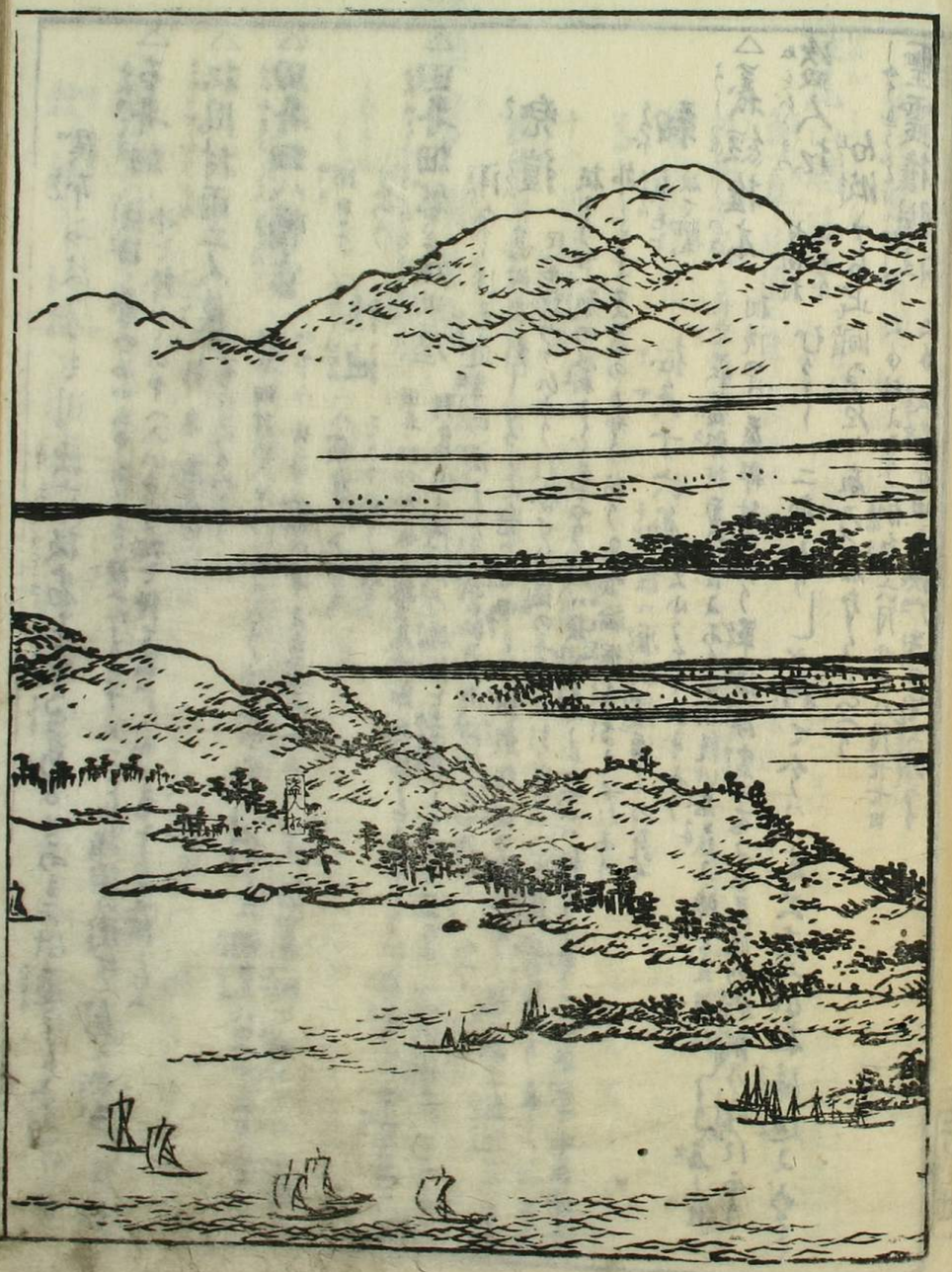
いにしへの駒ゆ林の松ゆれば人古蔭もかゆうゆゆ 兼礼

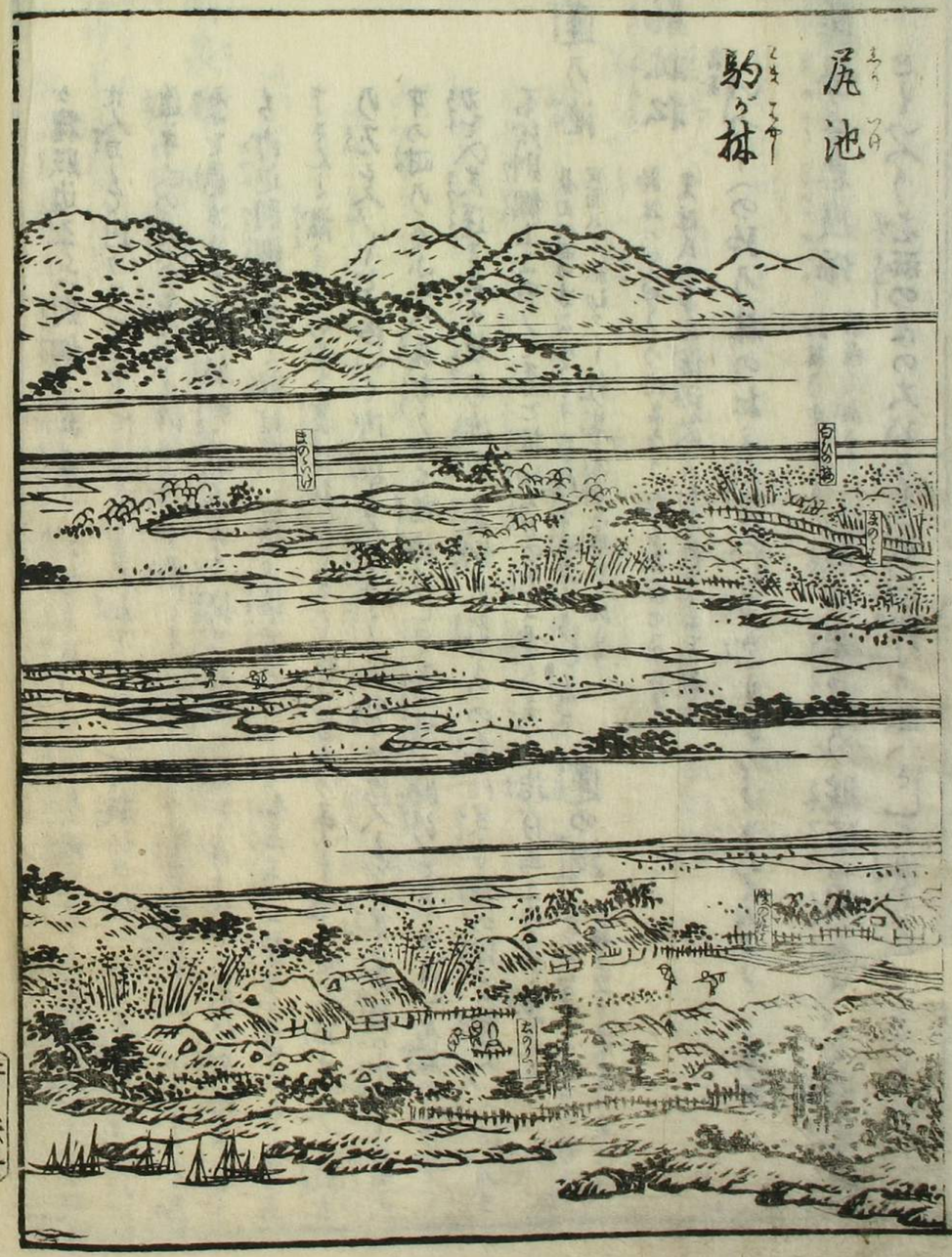
蓮の河 池のゆふぎゆゆゆ人形基の河ゆゆ其実ゆゆ

薩摩守忠度塚 駒林乃中ゆあり 石塔と居ゆう

位ゆ忠度乃腕塚ゆ明石ゆゆて腕塚町

とゆゆゆ乃西のゆの大ゆゆゆ乃ゆ須広ゆ西へさして逃ゆゆゆゆゆゆ




尾池
駒ヶ林

異本にはなるも川淀広板宿をおるとあるべし此道なるべ

△古井畑　淡路の墓の西小谷中ふしぶしの淀広り二十五丁ほど橋撫の境村と京の兵庫より爰に抵と称ぶ谷中八山古井畑と称て板宿へ出る道と古道なり

△松風村両二人墓　外平清盛の所に見えたり

△田井畑八幡宮　田井畑村の入口にあり　山石の生古木八月十五日又九月十五日の下十歩斗藪の中に古木の杉あり　しかし山田井畑と聞きし夫婦の村あり

村あり　境池　八幡宮の下にあり

△田井畑鷲尾田屋　田井畑の村長鷲尾源助兵衛と云者あり山紅花谷合藍の附九郎刑部殿と特城の源橋と兼因しるる支族の中へ四泥縁をしてその流

洋ふ山に毛近年の流るる魁の筋甲にて武家の乃御法よりも及びしとなり

魁猩　其附拝殿しるる近年の流るる魁の筋甲にて秋の方へ引合せたると藍紫板あり長こい拝着の

巳正峰つがひあり引合せたる藍紫板あり長こい拝着の

板あり下敷の裳まで毛あり　鍬い鉄柔糸にて裳い紐なり華い正平華小な神其

外ふと変花の毛あり　鍬毛と以て製

鞦　根い濯鞦猩通しの毛

△義経旗本　丹生萩藍那村南の入口にあり義経此本義と陣と称ひ名とし

相浦の辻藍那村より軍濃深宮の石又る尾清み特城乃陣とあり

盗人松　村田村　むかしい二本あり　しが枯て今は一本大木と山松源辺にあり

白波うち此所にあり　乃名なりとなり

聖霊権現社　大なる村にあり例祭六月廿日八月廿七日

大なる板宿此田本淀広の氏神なり

祭神熊野権現　一説に聖霊にあり淀滋賀県と濃なるべし　摂社　左手代夏命　右大己貴命　牛頭天王

桂尾山勝福寺　大なる村にあり　観音院三間あり　本堂二年文明十六年　傳法灌頂密教

名一尊　延徳三年長田神社　社僧芸の竟田蜂永正十三年　紀縁簿天正六年　聖霊

権現と称る文大永又年地る縁寺紀和歌山。一乗院勅願不なて本文聖観

観音山浄楽上人なて美言家之。什家に弘法大師の陽杖藥師供養の本

る十六名神の像月幡十日流弘法大師の筆両界受茶羅呉道るみ筆の

十六羅漢勅願筆の釈迦文殊普賢唐本の大般若経平相国の寄附也

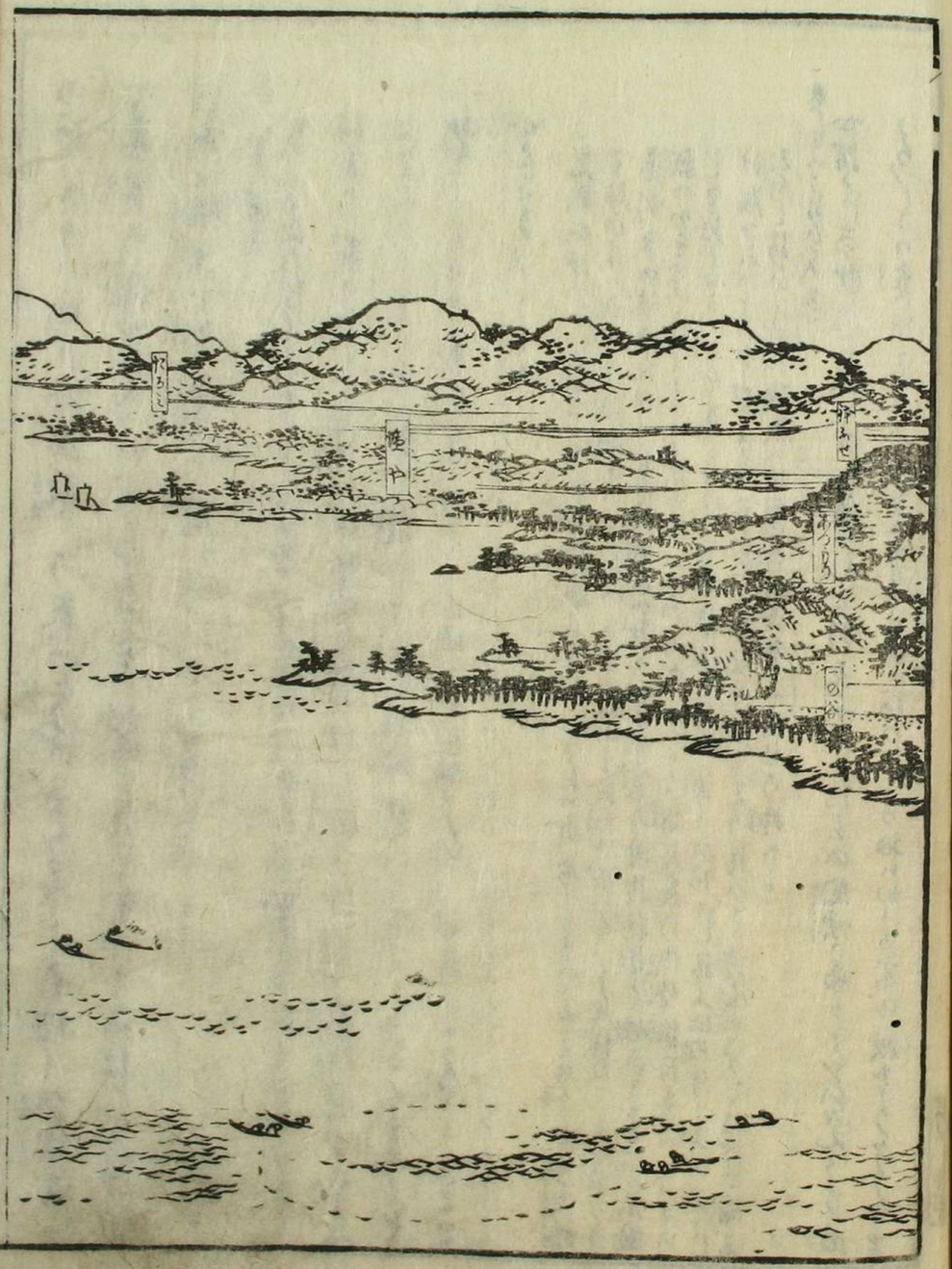
武尾寺　紀年の甲冑龍の玉其外数くあり

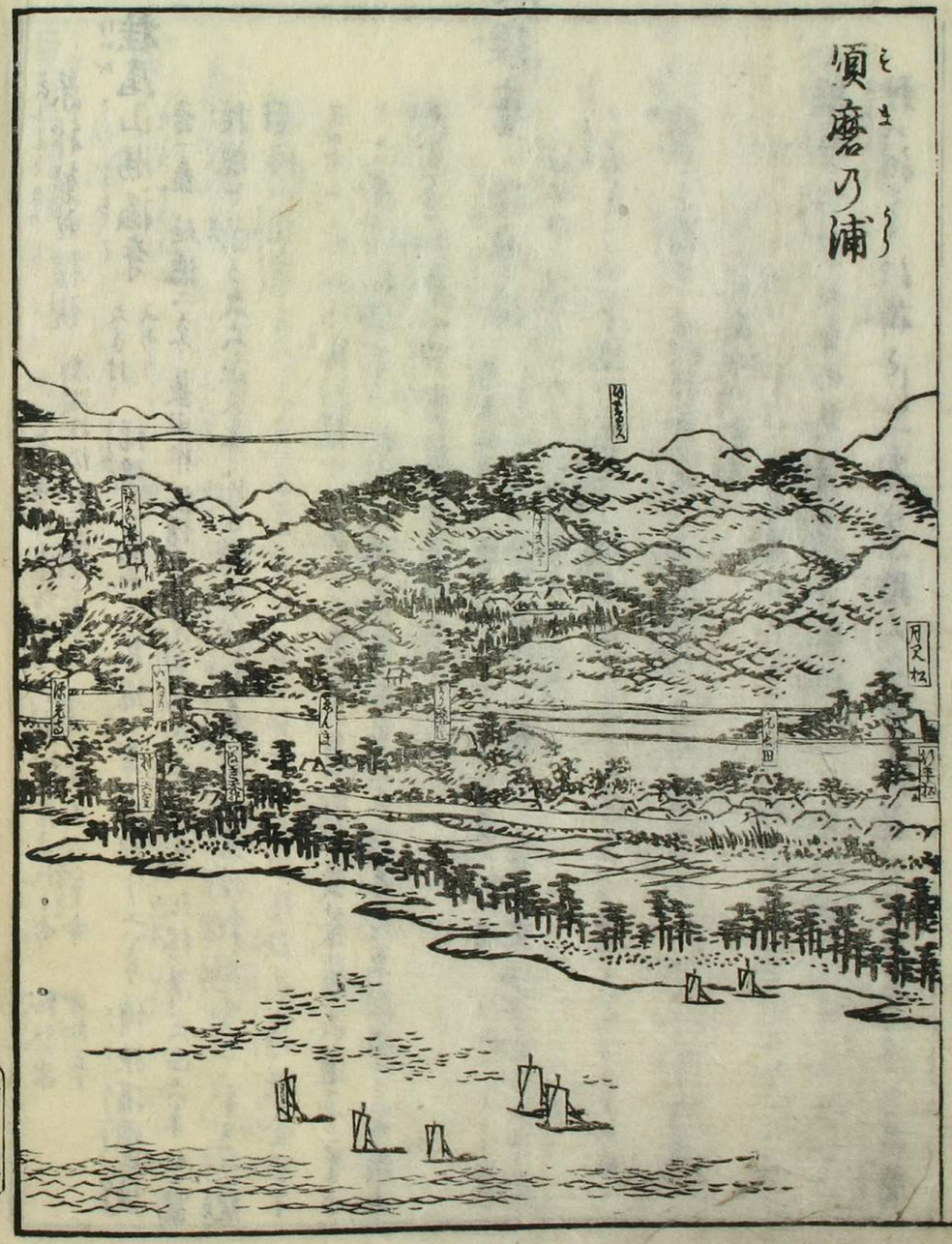
須磨　須磨浦　兵庫の沖より西まで里まあり今は西淀広東淀広三村と

八田部郡の四橋川の内なて淀広　なりて仮しの今の宮通の古道なり淀義経馬の関なるべくく

須磨　須磨浦　兵庫の沖より西まで里まあり今は西淀広東淀広三村と

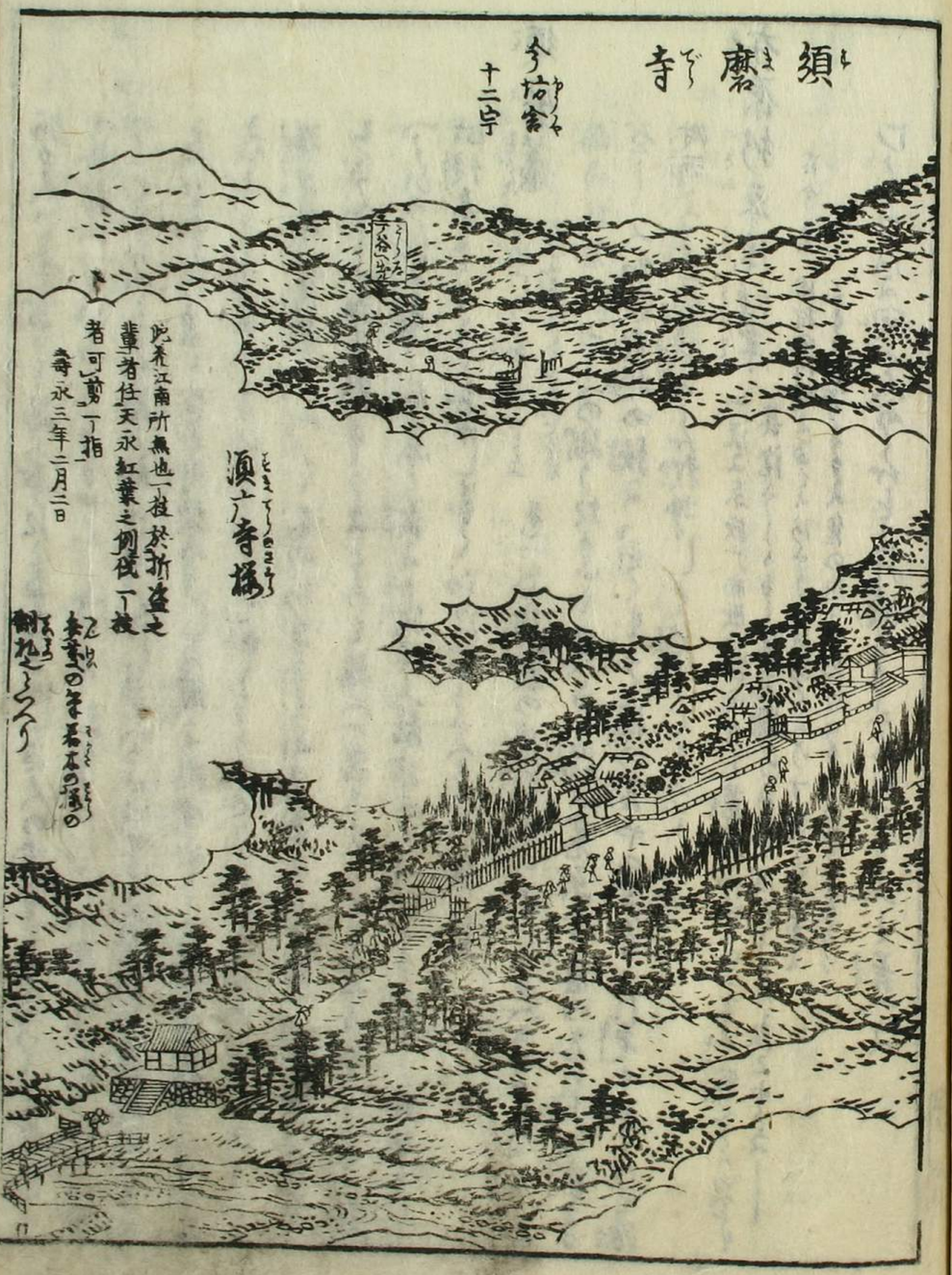
八田部郡の四橋川の内なて淀広　なりて仮しの今の宮通の古道なり淀義経馬の関なるべくく




須磨の浦

のりさまい源氏物語源氏の巻の文体よろづ〜先此の物語は
て幸実の儀おほなぐさしされど系地のさまをかき〜みはたらひ作
況んや暗語を加へ色を尚いみ〜へを叡考をべし
源氏の巻異文
かりとまいむ〜こそ人の俗家なるとみなし今いて異なれる心をづく
なまり家ぐふまれるすべ〜字語人と人ちげくひらけさうん俗居いて事志
みるべ〜さんそそく都と遠さうんも故郷捨ぐつるるへきと人まろくぞ
捨べ〜こぐ家のみきて〜うこ安くとを捨りひづけ語へるるべ〜きこと
ひとまべくなり
○光源氏源氏の流居のみい事きき風よもたりさんが近流〜えりのそこのそこき砲変稿
里語ひ〜い事より動動ありて移りうるはあ〜ひ自此流居の旅りい芸の宮の財術経験く事のまぐれ〜弘徽
殿の事紀平の流居に用じ〜さそ此流居の旅りい芸の宮の財術経験く事のまぐれ〜弘徽
殿のそそどのみるべ〜さ語人るる三の戸あきてるすり緑月表の内侍扇月表の加るとの
そ事れとロとさ〜て来りうりしと源氏きつぐ〜て語うひたりし語人此内侍い帝の足し
げ殿うれいそれをあやまち語ひぬるる弘徽殿い此時の帝の御妻そ内侍り語なり
えべと語ひ〜弘徽殿い此時の帝の御妻そ内侍り語なり
源氏ひうう語ひての文
心清く〜の秋風と海いぶし遠々しと紀平の中納言の関吹あるうひんうう波
るく〜い寒つちゃふきうえてまうるなりれる掛かれる不の秋なりうう中異

おり語きなどれと海ゃやる〜廊より出語ふ〜〜ぞ語ふ中異沖より船ものの
風ひのしまて漕紀平ふぐるぞ色かひのふぐちいされる乃渡へると見ると心
細げるふ渡のつる祭く帝考うぐの考ぐまぐるとを考ぐる語ふて御なるとり
らぐる中異恩場の御衣い今うふあり蓬の古事者その侍りりと図〜て入語ひぬ御衣をば
海と分まるるだかたうう和ぞ語ふり
○右の御文所て源氏御位家の撰をまるぐ〜ふこれうう尚源氏の一巻の始い系より考しと人
ぐるとあるうちう文競紫を家の九図二流と紫ろ文武ぞ又ケ事経験く親殿うち
遠帝帝此流と漕ふ此通ふ小其むまるる源氏の御むうひ〜なりし人
烟のつとちうくとれぐ之ろ絵ふれやいまの塩ゆ〜ろんと捨げ〜ぞるい船ま
ま源うし海のふう紫ふものふもを〜ぐ〜ろるも ふぐ門の彦ふうけれ
ふぐ〜もこ〜ひこうんふる翼人 色ふ船て雪ふうあれる法色のけ〜き
も語ふとぐ〜ふぐ語ひふ中異月ひとなうう色ひくえる足藤の捨ふ〜雲い
ふくまぐふま色ゆうのよる海ふうさ色も西入るの月をぐ〜ふるふ〜ぐふれ
西ふ紀人とひうぐち語ふく側のまぐるまれ暁の色ふるるとなるたうく
これもふるる語ふ人ふる暁いひうう語ぐふの赤もれの し あ〜れ浦いてふい
まうるれぐ月れ中異とまふは事ふうて捨ぐ〜ふるふ人〜若本の掛かの
ふふれふふふく色のふ捨のふ捨ぐ〜出〜まぐ和ふふ
語ひとうう〜まうう中異やまひのついうふ出ふる己の日ふ人ふん捨ぐ浪と


須磨寺
十二坊舍
須磨寺橋
此者江南所無也一枝於折盜之輩者任天永紅葉之例伐一枝者可剪一指
寿永三年二月二日

嫩木橋
源氏須磨の春の玄素をしのぶ

なる人はいそぎし給ふゆゑなるまさなしき人の出るとば海つらもあるらしく
て出給ふいと物かなしかるせんじ中將行平めぐらし此國へかよひける洪湯浦
めしてあらんとさせ給ふ松にきくしきんかくのせくるがれと見給ふまゝに
まへらまでく下略となど御歌ありしに俄に風吹出て大雨ふり海つらのふことを
まどもありらかりにひかりみちて物おそろしく雷かゝる心ちしけらうしく
帰り給ふ御國の人々本のたまどもあきれまどふ源はのどやかにて誦経
ちぎんじて物ましいきさうまどろみ給ふ人が其さまよもえぬものまいくるど都
へまびめし又寺り給ふと夢に見え給ふ龍神のこゝれたるふかやと物おほしう
此住居もうるさく物びしめすくおぼしのくくへうつり給ひぬ

須磨篭藻 西須磨の家每にある 岩は表にもどれとぞる 是一ノ谷内裏の遺風なりといふもさらんべきやうなれどもらるゝ又
浦乃塩屋のいふへの物りたるふしもみべき歌に葦原芦屋の名は芦の家なり
名しゝ和泉式部の歌に 昔もさく浦の苫やの苫をとれ筧をもうけて涙
時雨る我此遺風ゆか祀物しく何らんものう

在原行平侘住宅 一説に東須磨西須磨の間寺を菖蒲小路といふ其を鎮之と云ふくとも
其説さしかし此左遷の事を國史に見えず

古今集 田村の御時にあるよはかうて津のくにのすまといふ所に
こもり侍りけるに宮の内に侍りける人につかはしける

わくらはに問ふ人あらばすまの浦にもしほたれつゝわぶとこたへよ

と此歌にのこる左遷の事見えたりまことにかうてもはまた何の帝の御時としさ
あしらざるといふ拾のためなるべし

行平月見松 東須磨の小川の尾崎に古松の大樹七株
あり須磨の浦の一望の風景此にあり

○因幡薬師 ○松風村雨舊跡 ○衣懸松 ○因幡遠山松 是等皆後世の戯作せるものなり
衣懸は松をいう此ところにかゞるなしは

續後拾遺名

すまの浦や渚にたてるそなれ松志づえは波のかゝらぬ日ぞなき

松風村雨乃事 一ノ谷の後播州界の山麓に田井畑といふ所の長の女となる 准后親房記云 能登尾家久は熊王の
又ある熊王が母は田井畑といふ所の賤女なり此里は松風村雨の出し所にて昔より
悪女多しといふ又一説に松風村雨は元播磨国塩飽太夫といふ者の娘也継母の讒
侫によりて此所に離れ来りしもといふ 西行撰集抄に 昔行平中納言はやまに門す
ありて須磨の浦へ流されりしがここにて浦づたひしありきけるにあまの所
くみけるをむと問給へば

白波のよするなぎさに世をすぐすあまの子なれば宿もさだめず

とよみてまぎれぬと云是新古今雑の下にも出たり

右の説くつげたる是と見えたれども撰集抄の説信をべし 松風村雨の名はまけもなく
彼物語のあはれにより浅にも作りしなるべし其すゑにかうるあつでは

荊田氏故家 西須磨の里長荊田氏の家は神功皇后の御時より相續と云家宝数種あり摂州国志に委し

事代主神祠 西須磨荊田氏の後園にあり傍に古松あり是は神功皇后の御社あり昔皇后
三韓退治の時御凱陣に際に立よらせ給ひ出雲國より事代主命神を迎へ置と

詔あしび若田坂荒出雲國より事代主命神と宮を鈴清殿にまつり今の長田の神社を遷し奉りと家伝にあり今の長田の森の三座と称し

又とかり今の西坂下の村の里に菅之舟　昔若田氏の家載よりあり清水繁田十二家四者の傍藏

若田氏代名泉と酒を造る即菅の舟と称ス清水と称ス虹へすりしらくり

若田氏の西坂上寺の入口小あり寺号を法福寺と称ス　本尊聖観音　護摩堂

本堂の傍に遠年あり近年再建ス　聖徳太子の御作長三尺五寸脇士十二神ハ

若田氏拾不也　本尊薬師如来

清水繁田氏の先祖の図ハ若何某の寺ハ

きつひ僧せりしに付寺のすゑとそ其後破壊ス及ひ一を久寿の比源三位頼政

内せり有名ハ側年四月廿六日踊

村民ちうり拝ム

重郷松　茶所堂の西にあり

綱敷天神　西坂上の渡にあり菅之御社と号ス

ちうりらく綱敷天神不ハ

須磨上社　上の社一面の名ちうり古歌あり

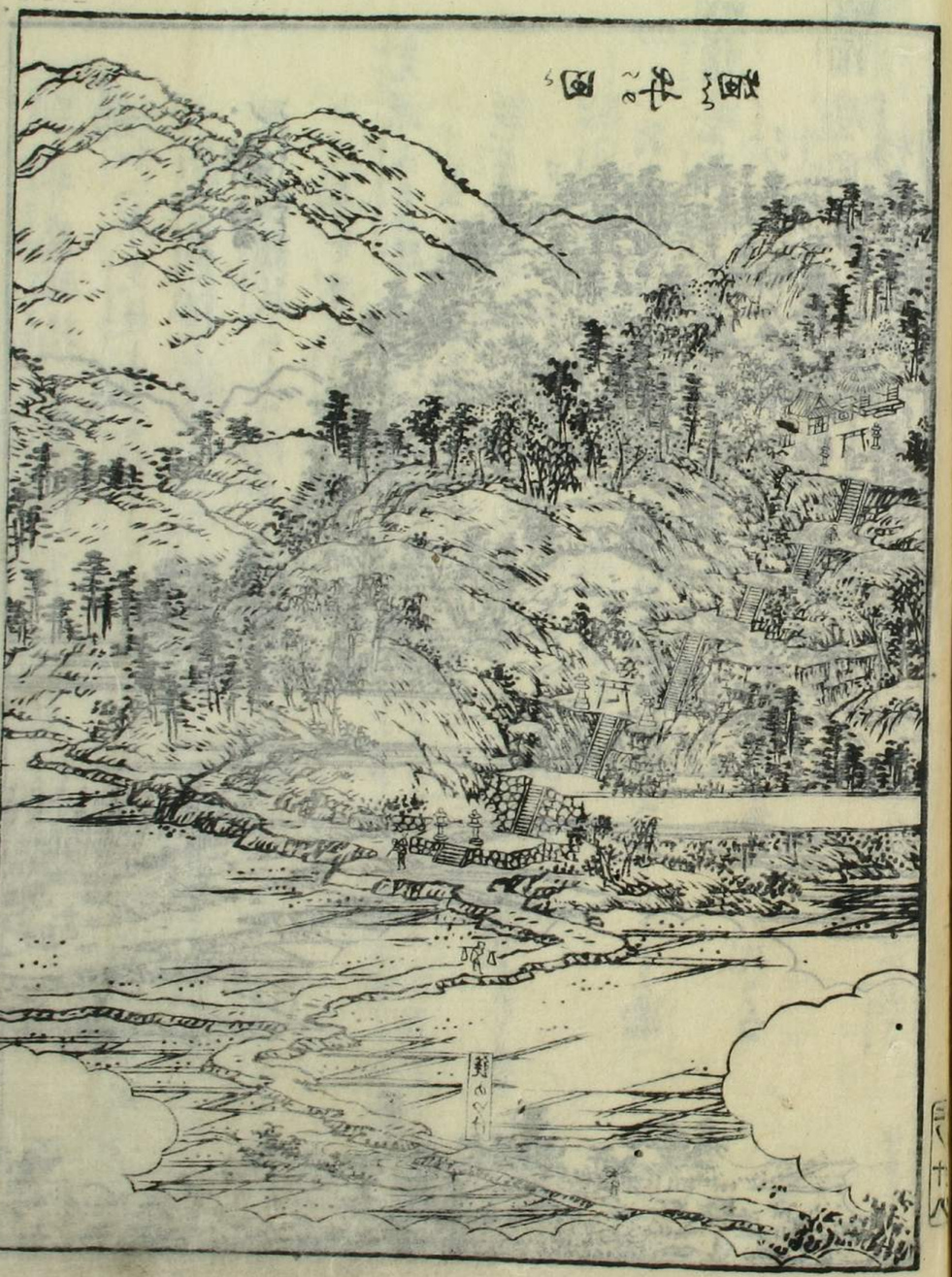
上野山洋福寺　西坂上社にあり御ろより三丁ちうり　本尊聖観音　護摩堂

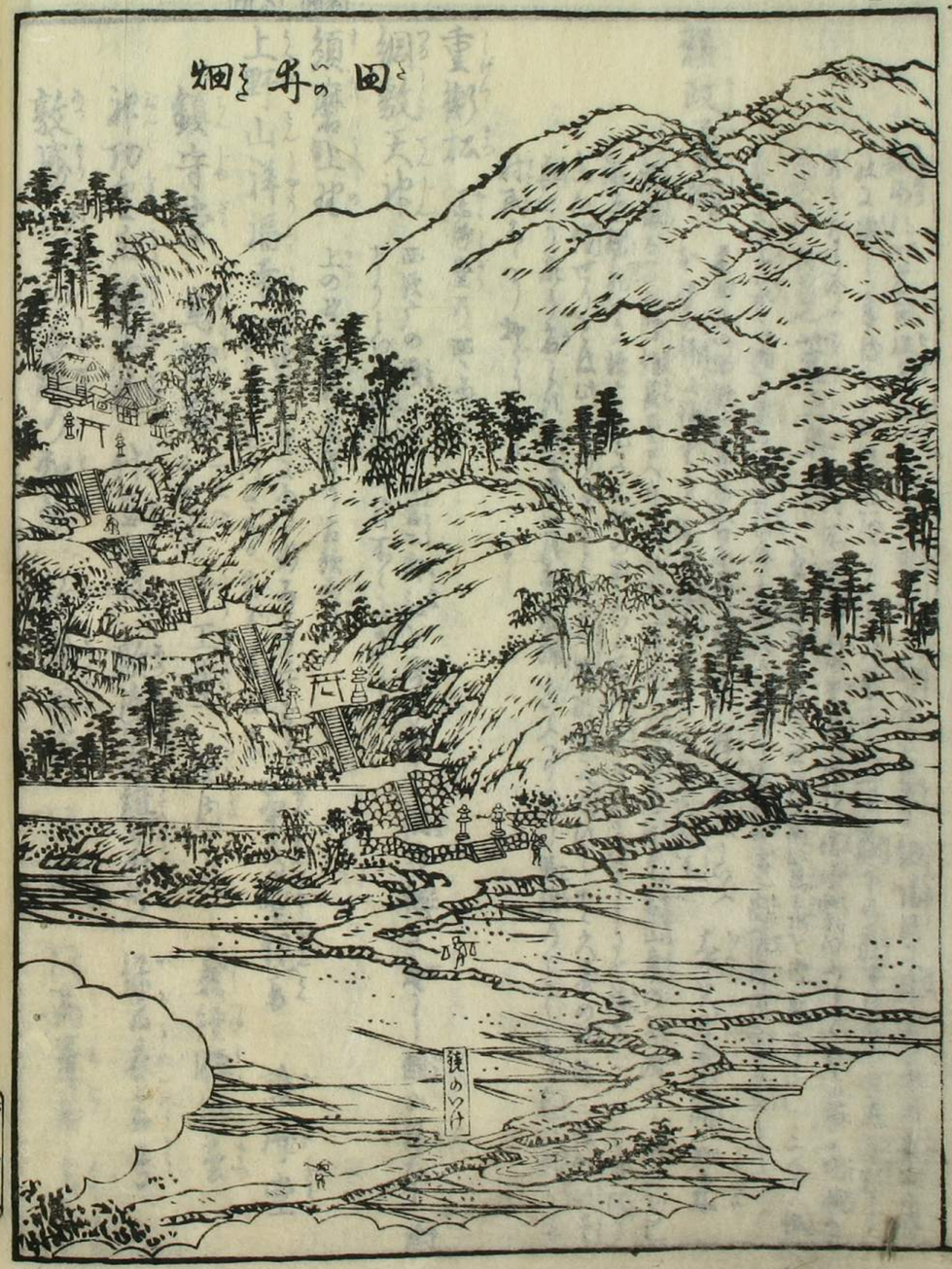
繁りて二王門にあり古墳数基

鎮守堂　馬盥額　二王門にあり　十王堂　境内に

神功皇后御手洗　什宝の内　敦盛赤旗名号　保呂衣名号

敦盛幼少の白歯の和歌　敦盛画像　同鎧　同高蒔絵書箱




田の牙畑
鏡めつけ

八幡宮

苗　弁慶制札　若本橋名　右縁起あり略

寺記曰
仁和二年文徳上人の勅して宮殿を営び丹青彫刻して林岳照華
の遠き焼刹なりしを今さらに八百余歳なり殿后久寿のころ
源三位頼政ちなみ帰依堂を建鎮守名と奉祭し此地を拓いて
山川色を潤霊感益顕なり

所名

光源氏舞跡　広厳寺の西南なり源光寺ともいふ源氏物語に此所双紙なれば右法のみぐるまに此寺なり永正年中建立の石塔とそ什物なり陣を張あり

芭蕉翁句碑　源光寺の門前なり延享年建立後鄙士芳麓坊ちれと建る

見るさせばなかむもてはくれて源氏の秋　そせん

風月庵仙雲跡　源光寺境内に四庵遺るり

月よりけ源氏の上世の秋の風尾花の波よつくしうし源　仙雲

所名

須磨張江　沼沢源光寺の西なり今いまの田圃にもりて名のみ遺るり

須磨関屋　源光寺の西南なるの左右なり一堆の墓あり是を法ちろり塚と称す

法名源かしの人なるの墓　源光寺

所名

須磨塩屋　今の塩やの上にさんとも称す塩屋とも称す東にあり今の塩やき家も海辺なり明石より西なる海辺なり天正十年秀吉の陣所なりそれより西の方一帯まで陣いえ

すま人の海べ岩さへ焼塩のうらみ恋とも我をとるかな

道羅川　源広厳寺の西なり流る関屋の西南なる中橋と称す

村上帝霊蹟　須磨川の西なり源光寺より上なり小祠あり天皇の霊をまつりしとそ

一の谷　此谷長さ二丁余横二十間谷口より波打際まで六十間石垣二の谷より西の方二丁ばかり岡余谷なり源平戦場なり多くの人骨あり

平家物語　平家此所にて楠義幸に播磨国室山備中国水島二ケ度の合戦に討勝て其軍勢十万騎に及ひ対面とも本曽討亡ぬ平家ひとり豫州国八島より漕出し播磨の国雛波浦一谷に籠る赤い生田の森と城戸口とし西の一の谷其中三里なく續きなり此一谷の口せばく奥の廣く南の大海漫々とし小い深山嶮しく馬も人も通るべき様とそなり名に海を背に嶮を其数とも見る風吹もてく天に数万艘浦へ漕入は赤旗を其数とも見る風吹もてく天に翻るそ

○坂落　永三年二月七日の曙一谷に攻籠る平家の陣と彼らんと大将義経三千余騎路狩に打ならしてのの

一の谷

内裏
山陽道

城郭を遶る足下しいで試んとて深馬又疋鞍毫馬三疋を蔵れ
し鞍毫なる馬い給へ之たぐる馬い先づ吳物にて中より側とて始
紀なる又鞍毫馬い美なし城中茅屋が屋形の茅にみぶるひしてそ
之なりてくをんて義經備ねる示して日抑のが侯る深馬ハかくの
おとし勒あるものを私ゝ忠とゝかく全し心得給ひさるやと
下知をなしくるを西う三十騎斗盃盃を恵れ落されなる二丁だうり
泥と落ーて抜てられば一段墓のごく平なる石あり表より巖
壁摧うさなりて苔むーうり異なくてはいう小通ぶれるもるべ
と直なる下も直なる彩も陥るもうごれば有きとてくをうる侯ゝ之
聽と馬ひ宝めなる

評曰 信谷なるのの大両毫を懸して九丈ばかりの一段墓
の掛合なるものなり何ゝもせよ毫を抜ふた落さ
の郭場ありそれより下ハ屋形を之なるごし
人馬なりし落之きゆうなるを見ぬ人馬を繰
一騎之落さば落さるを不あり九之事内者もて之なるなー

安德天皇行宮古跡 谷のとよりなりし深ゝのとせしの谷松二十丈斗ありて小名の地
宮殿なり和說先陣の地なりとも 安德帝行宮とし給へ方廿間なり

二の谷 此谷長さ三丁餘横八間なる九間谷口より波打際まで
間十間余三の谷小なるなりまぐの谷二丁余を之なり

三の谷 此谷長さ二丁余横九間なる九丁谷口
より波打際まで千間余之を間余の間なり 鉢伏山 俗とも之なるふ仏なるうとなり名づく此山
堀及浦なる 鵯越 也

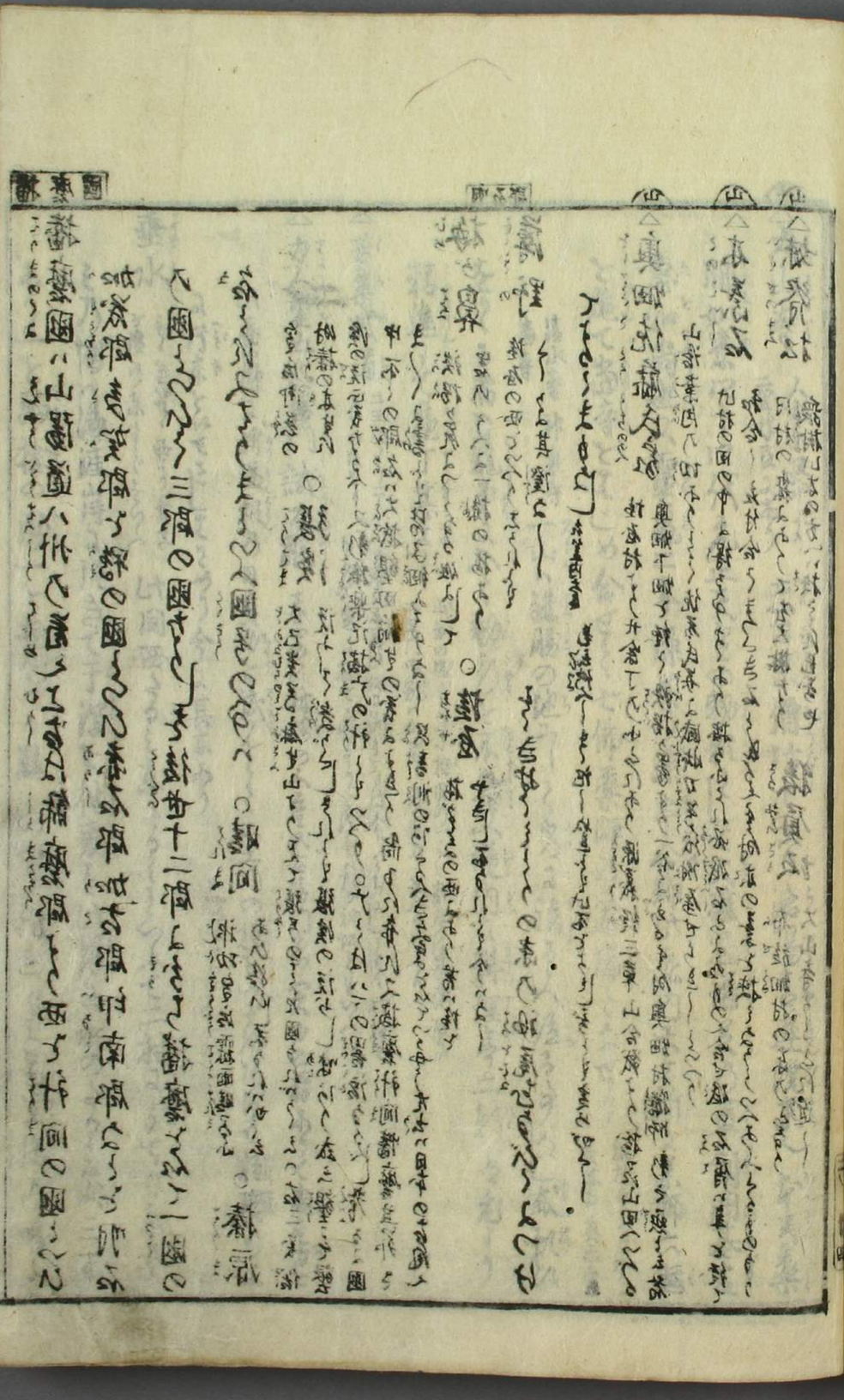
鐘懸松 一の谷の
中なる也 近年古松い枯て今い拙種なり古松の根を切て新松を植

狭弱峯 一の谷の
峯なり ○一説に鐘懸の峯なるべし城郭ーの名なり義經谷と為ーしより

鵯谷平山一二の谷 三の谷の
西なるあり 鵯谷平山撮るるが鵯谷又ハ先陣とせんとゝ國の間こ
ゝ古道と經て一の谷城中際まで出ゝ西の赤戸より寄せて一の谷の先陣とせんとゝ
鵯谷ゝ鵯せられんとゝ鵯谷の先陣とせんとゝ城戸を開ば平山い撮られども城戸と開きゝ
城ゝ撮ら和二二のかけと平ひらう

大五輪石塔 俗ゝ鞍毫の石塔ゝゝ 三の谷の石塔ゝ 谷崩 磯ゝ磯ゝ
平家物語 安宮大夫敦盛い清盛の弟 經理大夫 經盛ゝ
て只一騎ゝの私と志ーー一丁斗懸がせ浮ぬ洗ゝ
即直実ゝと招き磯ゝ組で落ち絶ゝ鞍毫ゝ
て押へ首と切んとして内甲を見ゝ上ば十又六斗の若ゝ薄薄化粧ゝ

孫猿くてゐ抑ひく鎌谷心弱て我るとに年ちるふ孫につまと繼
し助け進ぜんくは思へくも道を法ふ乞れ御身ちるに御妻搦とば
其実強く訪ひやべ妻の蔭うて御覧ぜよと同と塞ぎ歯と喰合
せく涙と流し御前と撥落に平家の人くに討るとも情とまてに
きうりうしき漢竹の笛と香もむけまじき鶯の袋と入く纏乃
引合せさくしうきまより後弥毅心して運生坊とはるとり後馬
護笛とも前と立流く又緒盛に送られる
一説に鎌谷傷くあるしの山附乃左とあるに又日前に六条室町の墓とらけ七十三日
八条河原に焼せしく来櫃に見へうし
○又蒙の小部村に石塔あり刻て曰長永八年建る姓氏に詳なに
陸奥風土記云武内宿禰が嘉御新墓とて是の御墓を賀るとあり世一説如佛尼と
按来使資賀郷のむとあ毛是の記後に拾遺に曰鎌谷の勝
称し彩若光寺御机の傍に一院と建く蓮華院と号し一説鎌谷の勝
法院玉阿上人病のあり此とありて死に拾の扇を制し拾寛に加持させく
上人の病恵とはしめられしに死てあて蘇せりそれよりうの寺傷扇とあり
御教書いえ櫃林皇后の剣違なりしが玉阿より時宗と成るとぞ
三の谷より西に丁に有り岩に歩まうくに川中に傷示あり元禄拾二卯の國界と其傷示の
阪に沿目と入三かの行と折辺濱沿国に鎌倉上溪流の界とあり後に此川街道
を渡さて西に摂州塩屋村へ八丁に小濱国戸より十丁里十九丁



播磨國ハ山陽道八州の首にして西は飾磨郡より西を升岡の國とつゞき
加茂郡多賀郡を路の國とつゞき赤石郡加古郡印南郡ゑとを明石
の國とつゞく三郡の國なりしを後世十二郡ゑなり播磨と名て一國の
名とはなりまして國号のすハ

○賜岡　非功皇后霊雨賜ふ所あひ治ひ給ふ云　○榛原　皇后御巡の時榛の木生ル　○張濱　大己貴命の御子の本生ル　濱の流出義なり　○彩嶽　楽記播磨の神　○張濱の流出し味なり　武三郎云　中古の郡名は大抵郡國編生の義なり　尚ほ命ぜ又撰磨升岡幡磨其外さまくの書に見ル所なり　只吉川の説なるべきなり　○ハヽの墨流なるべし　考る國

梅ヶ鼻　浜揚ゑ気なるべし　岩のうへに一株の梅あり　○塩屋　梅ヶ鼻の西にあり　黄い塩と　やきしあるんぞ分いかゝ

薄野　塩屋の西にあり　黄い塩と　うゑ其邊さ

てるこまも已　元亨内宣　也　紀伊国へ　也　紀伊国とも云ふ　ゆ　ゆ

△奥畑伝藤氏家　塩屋村にあり　奥畑下畑と称く　源義経三草山合戦より移る　山路素角の切あり　奥畑村猪熊氏　彩を藤師　彩を藤と云者

△赤茶石　此村の田の中ゑ得る　和合　元付合くまつゞき石　月村の森ゑあり　銀樹山本の方へ抜く

△妹背松　猿頭坂　布施畑村の東の方

△大山寺　人皇東坂廿より　天台宗僧坊十二宇　法陽寺蓮花寺　本尊藥師如来　二重半良ゑあり

師如来は十二代元正天皇の勅願として大職冠藤原の草創開基ゑ
惠和尚也又霊亀二年藤原の源宇合卿此所内六ケ所ゑ藥師六所願
を造て寺をはじめ合せて七佛藥師の道場とゑるせり

清水寺　神集寺　一山の弥勝の地ゑ　藤林寺　長谷寺　奥宗寺

をゑる若い籠堂ゑ入く勤行を不怠ゑ境内ゑ料理亭二軒ゑ元ゑり
精進ゑて庵丁甚ゑ　山谷の陰　二王門の新い小せ

△若葉滅道　二王門より二丁　俗伝ゑ元若此坂ゑ御巡行ゑ　ゑ元て実ゑ捨て

△力人堂五右衛門試力跡　天正の比林崎の人堂ゑ五右衛門と云力の者ありて尚ゑ力と
此藥師ゑ祈願の日其力を試んと欲く二王門の柱といざなひて撞鐘の上
ゑ行本を抜てさしてさゝり今ゑ其本あり

垂水　此間西ゑ東ゑ流ゑて二村ゑ分てり東ゑ
ゑ乃塔い海涯岸ゑ出きて于潟と往来を此岸ゑ水のゑく流ゑ三百
あり一を釣捨の瀧一を押んぢう瀧ゑつゞ捨ゑ先里俗の呼ぶ

垂水神社

日向明神

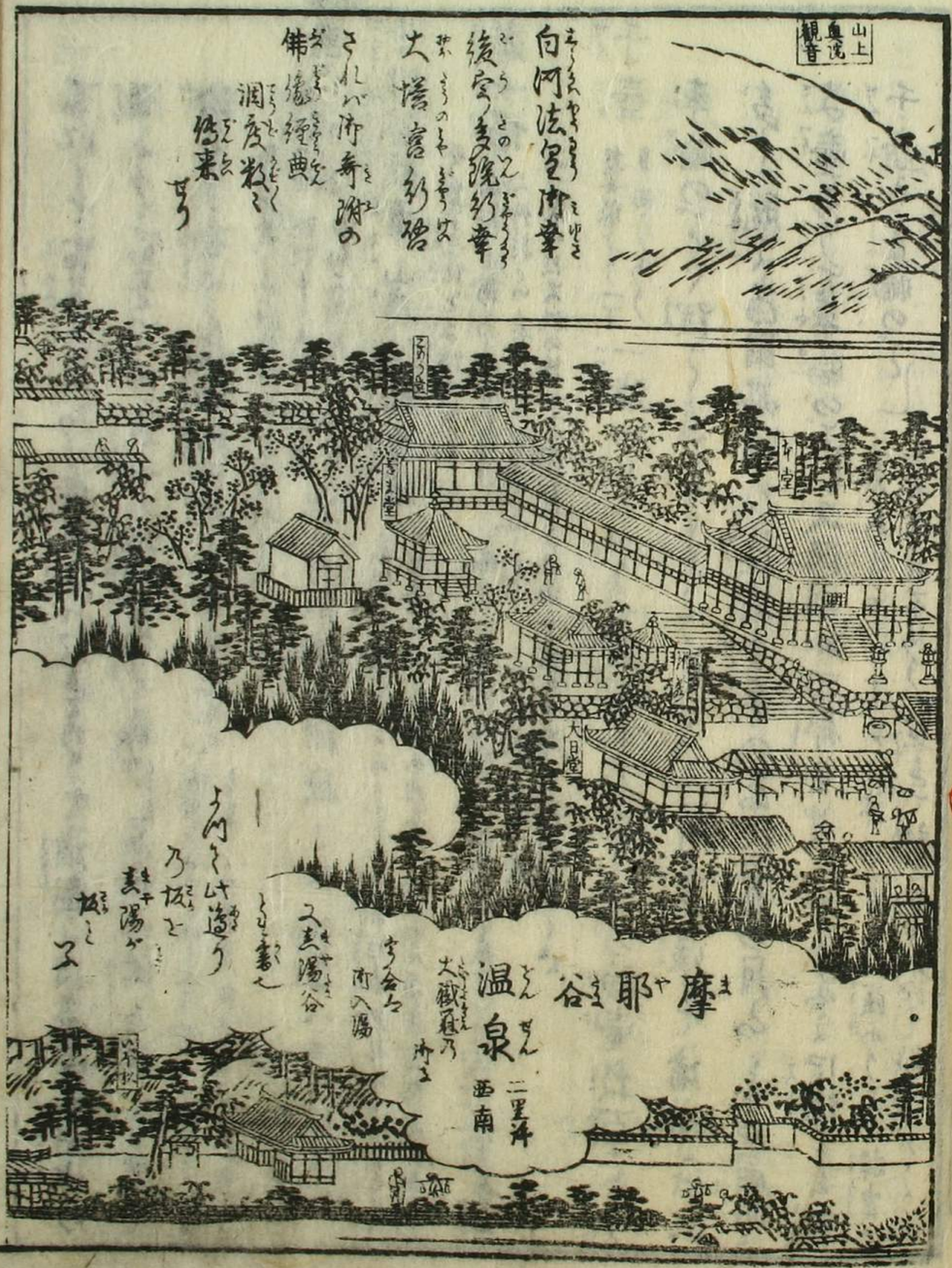
夫本 垂水の神
たりのぼる人のゐる
宮ゐ
ひとゝ
たゝ
垂水の
巣の玉垣

後撰

按るに小神名帳に海神
と書しゐ也ワタスこゝろ
なし 即信吉こそ表中
屋の三屋之日向明神と
ゐ也ハ小戸橋の
國名なるべし

海人國名より二石余の
領料 秀吉公祈祷料
として御寄附の
其山携橋
なりて 携者
法とれて 橋

大山寺
地蔵三所権現
薬師 釈迦 弥陀
大釋石
今其法花如来
輪観音と妻恋
良ゝ尚つて鬼門
法養の霊屋あり
三方いろる山也
瀧
男瀧
女瀧
乾瀧
照明瀧
春日
三重塔


山上
聖観音
白河法皇御幸
後宮多流行幸
大塔宮行宮
されば所奇所の
佛像經典
洞窟数々
伝来
摩耶谷
温泉
二里半
西南
大蔵経乃所
字金乃所入湯
又湯谷
乃坂と
湯ヶ坂
又

石にして古名を付け垂水いたるところ諸國に同名多し皆水の
涌くるを以て近世に水利乏しかりしに水の法をもうくて名の
如きなり故に海辺の用多し石之 古考に云ふこの人のよろこびとなし
も石くるの義多きなるべし

出るの義にて此地にはかなうべし

垂水神社 西たるみにあり式内 日向に同神と称す 神名帳海神神社 三社 例祭八月十又日

千坊谷龍華山薄法輪寺跡 東たるみ巻のようにありて大伽藍坊舎数百ありしなり
今其遺址を郷名に人家の茶にあり 堀上に宝篋塔あり俗伝に玄建武の頃建立の
遊女塚 西たるみ郷名人家の茶にあり 人所村より菊江にの遊女塚ある也 ども今いにしへ郷の内三十余丁ゆ寺号古佛在り
この一説には大坂の遊女下関へ行くに海に溺死せし故に此塚と云ふ

千壺 遊女塚より一丁 半西にあり 一堆の丘にありて周回壹反又半 洋の陶壺数百ありて
車輪のごとく埋まる 其多きを見つるに人の荒法にて諸國に此類
多し 既に西國姫路の法隆寺の東に震の用ゐ 此の周回
み壺あり車輪のごとし 又日國加西郡北条にも石堀にて物
千壺みな車輪のごとし 又宗良より西三十丁許に神功皇后の法あり 拝宮と
称ず石にて人恐れて敬て近づかず 此二年ばかりの

壺はまた埋まり云ふ 若しは方に地色あり ○日本紀垂仁天皇三十二年殉死を禁じて出
雲國より土部百人を喚び埴を以て人馬及び種々の形を造り生
ろ人に易て陵墓に樹ること後世の法となる 依て此土物を号て埴輪と
云ふ又土物と号く 三 此説後人尚未詳 此川市にて人形を掘出す 数多出偶人の形に外側出あり
其大さ男人のごとくして其外掘出す器物多し 此日本紀
垂仁紀に殉葬の人のごとくして其例多し 今殘るものの
石人石室のごとくして 当石の宝殿にも類あり

○一説に此山陵を造る人仲哀帝の別腹忍熊王を詐て造る事を
日本紀神功皇后紀に三韓征伐の後忍熊王と競帝に奉ぜんとせ
忍熊王を害せんとする天子の法を造ると偽て播磨に出て山陵を
明石に造ると編て明石の岸より海浦の岸へ直に其海の石を
運ぶ其人夫に徒弾を与へ急ぎ造らせ皇后の選ると結てり 三

烏崎 按ずるに此説又一説に味あり一説又塚と号て帝運幸の時に祝壺を埋て厭魅
祭しるしなりと云ふ仲哀帝の陵法を河州長野にあり
壺の西より幸の浦の西まで
て鎮ず故に遠て墓ありと云ふ 雑烟隙 焼あけり 三

舞子濱　たるみの西さるまより山田村との間　東西十五六丁南北五六丁の松林なり　此地古歌多くしい必名所なり

さんどく名高きの天下に比へうる色正しく砂色松の翠なる物と異なる

ゆゑ砂い雪より白く数多樹の松と高低うく梢を交へて大なる

枝乾屈曲をなしうる足有りて系の色殊に深くして緑の毛のごとし

いろさまざまの砂尾と強のえんとつと色一変して猶松林の美況(言葉)

岩家　舞子の濱海辺こう三丁ばかりつき　間口一百五十余高さ二百

十丁ばかりの奥の四方にまり其数三十六ある　周囲一百

計して大小五十五ヶ所の石を以て造る屋根に二間余ばかりの大門口一枚紙

くに入るの色階つゝ〳〵乃墓〳〵なる埋たる物両露よりうれかく敬しし

もの也大石の人家ゆゑつゝ流い風ゆゑ此数多〳〵

山田　舞子大蔵谷の　平家物語高倉上皇厳島御幸選御の紀天日の日二大晴

海上も長閑ゆゑ風不の御船とをじめ多くせて人〳〵の船ども皆漕出る雲

の波烟の浪とうけ漕ぎ治ひく甚白播磨國山田の浦より出せ給へ

吉祥山多聞寺　舞子山田村より十余丁ばかり多聞村にあり　天台宗開基慈覚大師の創也

本尊毘沙門天　○遍寿及び此近郡御朱印の伽藍地なるのゆゑ巡礼

法のあり所の況より此ましゆゑ寺領の百姓を綱の番の為数十人

毎年十二月朱より清進堂〳〵甚白書上の時より一山の僧侶堂の手業し俳諧

の方達とうげ漢絵成の中初めの

此ゆゑ北斗まくの男ゆゑ十人ばかりうれ出るこれを

接ぎ合せて意柳ゆゑ小れい内陣より又ゆゑの大鬼又人ばかりうれ出るこれを

見て小鬼いらるゝゆゑ逃去ばかり此大鬼の面い三尺ばかりゆゑ甚古物ゆゑ体

もゆゑて鬼形とうれしゆゑ白髭ゆゑ中年藏大拒史樹杖をゆゑ小鬼ゆゑ

退ひさらして張矩史弟とおうて堂内を踊まめぐるゆゑ人物の辞集数ゆゑ

人目多小鬼波とあげて持くゆゑ馬ゆゑ朝ゆゑ彩ゆゑ多ゆゑ書て殺

大蔵谷辺　これ明石の駅ゆゑ北より王ゆゑまくい家樓ゆゑ甚出村ゆゑ　○武云往古諸國ゆゑ屯倉と

ひく朝廷の正税を蔵る倉ゆゑ若け蔵の出し不てやゆゑん

風雅集　旅　世の中さいかゝ〳〵なる旅ゆゑ　とゝうて大蔵谷〳〵ゆゑ

今むかしかたらしの浦ゆゑ〳〵まぐ晴中〳〵ゆゑ我袖ひしゆゑ

藤原惟成　藤まろ〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ蔵のきめぬらん袖ひしゆゑ〳〵れむまやくゆゑ　宝和

紀大納言為氏

紀いまゝくの大蔵谷の多ゆゑ

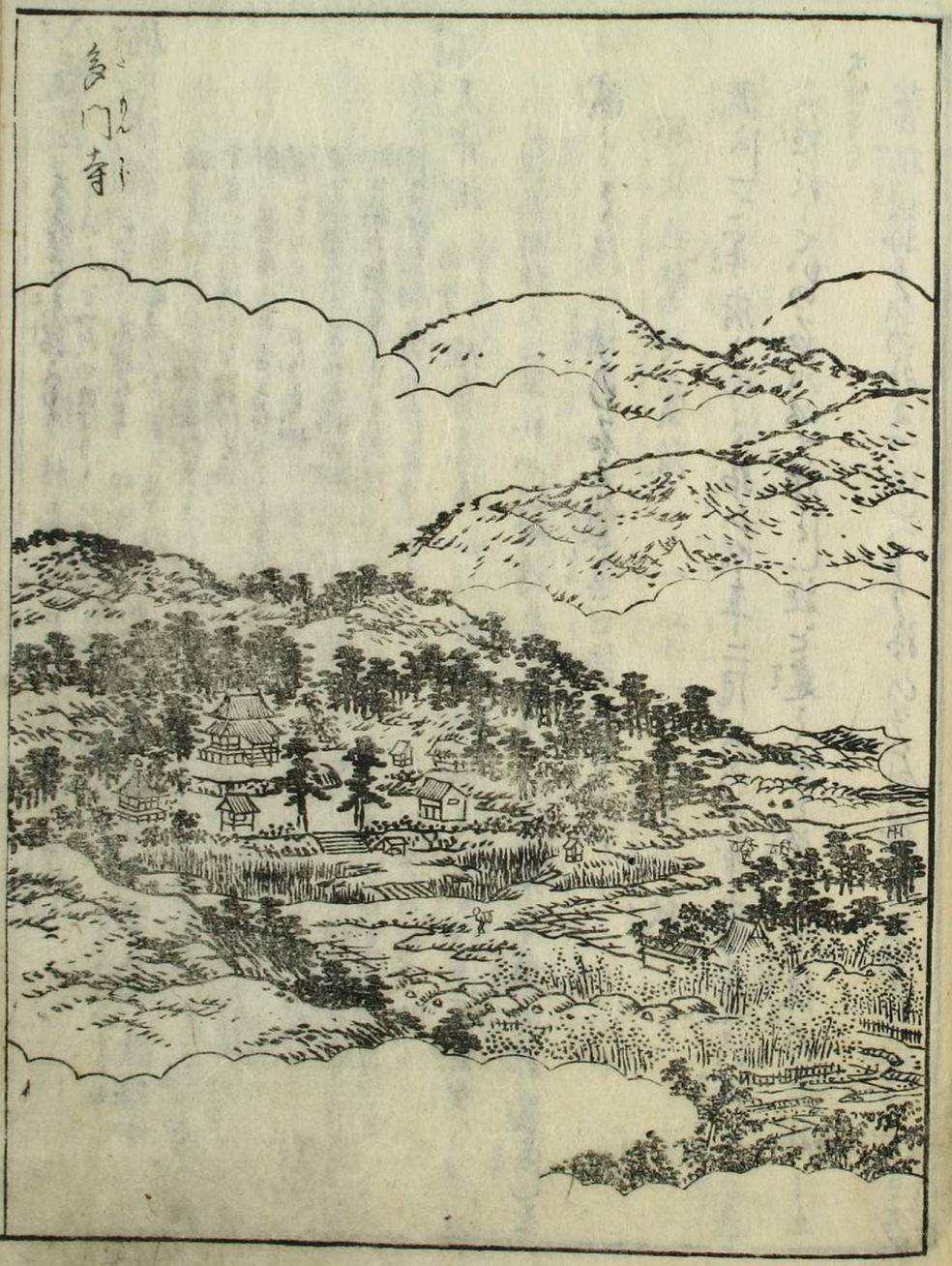
舞子濱

武庫郡に浜洲山
横たわり後は小山
つゞき其間は隱
と志り浦海南方
の風ふるふ吹こし
て本ぢ人の宜とする
後のふれ畧をうを
とし後よく生育
の理を得たるなり

源貞世 道ゆきとり
明石の浦い詠よ志濱
りあきはけちめ見え

ふるゝちしく雪紙きさる
ゆうすゝ人よ緑の松り
しをくく
濱風り
なびき
ゆれふる枝よ
白波坊
ちぶりて
ひゝく
うゝそり

傳法輪寺


多門寺

八幡宮　大菱谷の東端にあり　俗云鍬倉の霊と称す　弓矢神と
号けしと河の北すりう八幡宮と称し　岩清水

稲荷神祠　大菱の東神ちう　印級　俗に　祭神三座　大山祇命　面足命　惶根命
　　南角に三の宮元是三柱と　社記云人皇三十代推古天皇の御時摂津国の三柱明神といのりて功あり　東一基西に神宮寺をやう　顕文大の字をかき　俗云稲荷　俗云狐　或云稲荷稲妻　往古祝稲とあり　稲荷の西にあり

休天神祠　延喜元年正月左宰相師平任ぜらるるに筑紫に迎せらる　府祝此地を歴給ふ　時驛長迎きりて其事を嘆く　神其志を感じ給ふ　橋の傍の石に鍬の懐息せ詩句を残す

驛長無驚時変改　一栄一落是春秋

祝はして宰府にゆき給ひ　明年二月廿五日宰府に薨ず　驛長長義
に絶ぬ　かの石に腰掛て神はし社を建て是を休の天神と
大鏡第二云　菅相丞押しひの外にうしへり給ひ　橋慶の明石の驛にうづ

法ひろふむまやの長いしく押し歌ゝきと所望じて悔り給へる云々

源氏法華巻に源氏明石へ御たゞ給へをゝむる人ありて其名抄の言葉

むまやの押さよ白詩とゝもとる人もみるゝ紙まして押ちとまりぬべく

うん押ろえゝり云々

先皆蓋に篠亭白號のよとゝり尚明石の妙巖所廟の磯辺に妙巖集に見えたり蓋に墨に

序にいう妙巖集に見えたり蓋に墨に

忠度墓　大蔵谷の西の札場人丸の石碑ようの石の左へ入方にあり忠度町とゝ　石碑大小二つあり小碑前の塚也

源忠國郷の和歌にいう

今いくのゝ山さびしく残る名のことけよきざめる名こそ捨されね

其昔い遠歌と押きはし法に松とゝ人うとそ大碑い妙巖所文所に序を妙巖に明石儒医繁田氏右衛門諱邦美ゝゝ文い文集に載りゝゝゝ墨に

腕塚　忠度墓三丁ヲ小浦土町の茶屋あり　両馬川　忠度塚より人丸の人の

右度の腕と埋しゝゝゝ腕塚町ゝゝ　ゝゝあり細流也あり

柳本人麻呂社　忠度塚より三丁ヲ小東坂より入る西のゝ方の東の方に九州より建る西のゝ方の

の傍に人丸の井ゝゝ信水あり毛利陽の山門の紀い宝殿寺境内云の来ゝう

本像長七寸神の勅諭の年月い詳なゝ此社ゝゝ小稚ゝ元和の比

明石の城繁ゝ附なり明い今の城内の地ゝにうて軍況人丸塚の戦ひ抜

と記せり尚今城中ゝを小河あり本朝文粋敦光人麻呂の懐ゝ云々

姓い柳本名い人麻呂上古の歌人ゝ持統文武の朝ゝ仕へて彩田高市の

王ゝゝ遇ひゝ云ゝ歌道の聖神と崇めてゝゝゝ代ゝ帝王の奉幣ゝ

御制ゝ綸りゝ享保年中正一位の号ゝ賜ゝ諸歌ゝの徳ゝありて郡ゝ

ら民人の信仰事深に奉ゝ国ゝ城主松平信之云ゝ名乗ゝ雅章卿弘文院林ゝ

士ゝ見ゝ記ゝ録ゝし社記あり播磨国半菴稿貝書」て奥ゝ記ゝの

名松平信之の士民十九人白髪一人町人二人と記せり

○又ゝのゝの歌い古今集羇旅の部ゝみゝ人丸石見国へゝらるゝ

附ゝ小浦より船を出せゝ附の浦人見玄妙の境ゝ古人皆ゝと

歌ゝ見ゝ歌ゝ実ゝ社ゝ遠ゝう柳ゝ小浦の浦民解ゝゝゝ

うさまゝゝゝゝしゝゝていまゝ心ゝゝゝゝ小雑波の備奏仲餘

材扶ゝ解ゝ不其資ゝゝゝゝゝゝ感ゝ因てゝゝ其大驚

をゝゝゝ

ほのゝくとあゝ小浦の月きゝゝ境ゝ船ゝ私をゝ乗り人

大倉谷

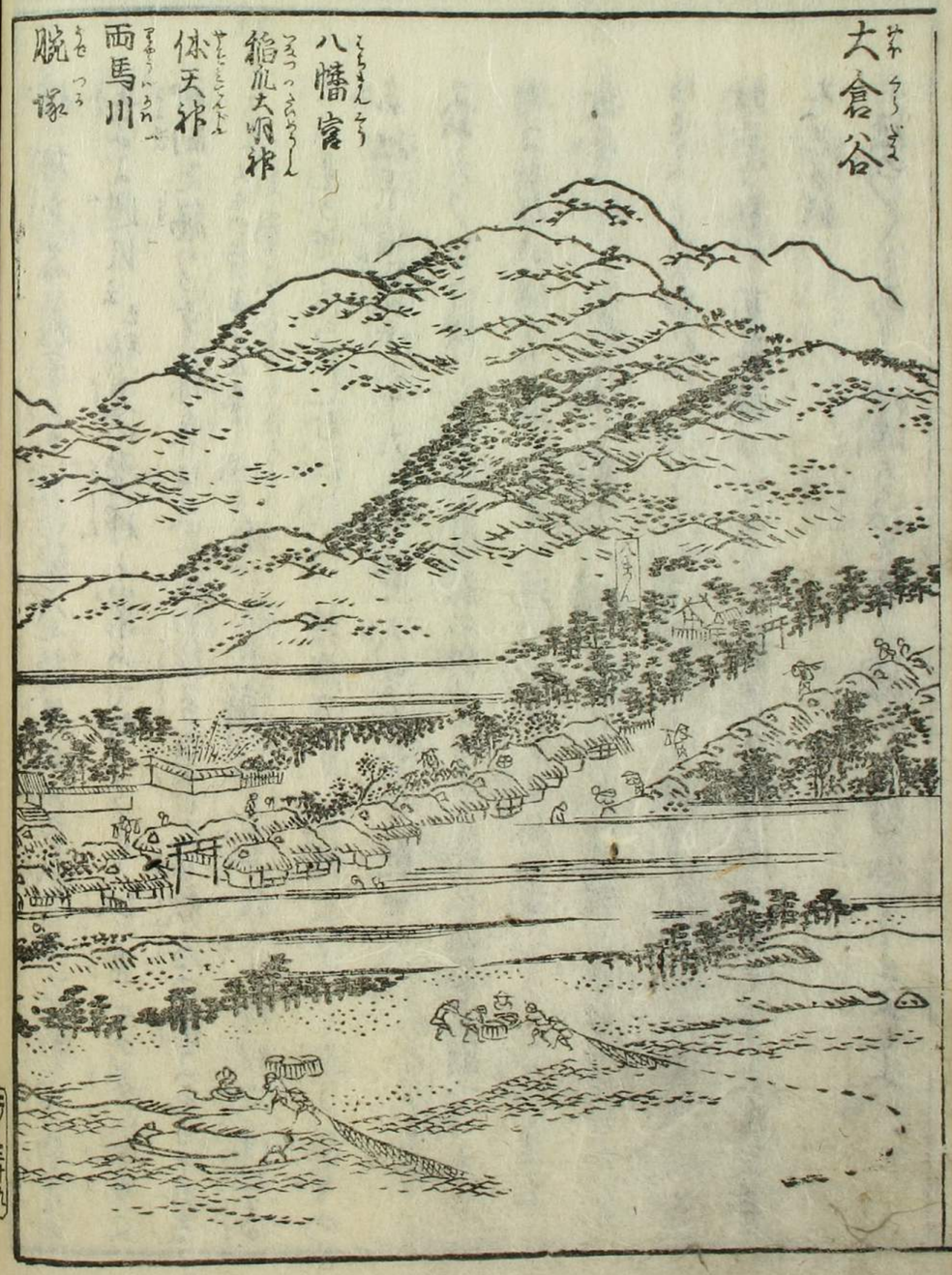
八幡宮

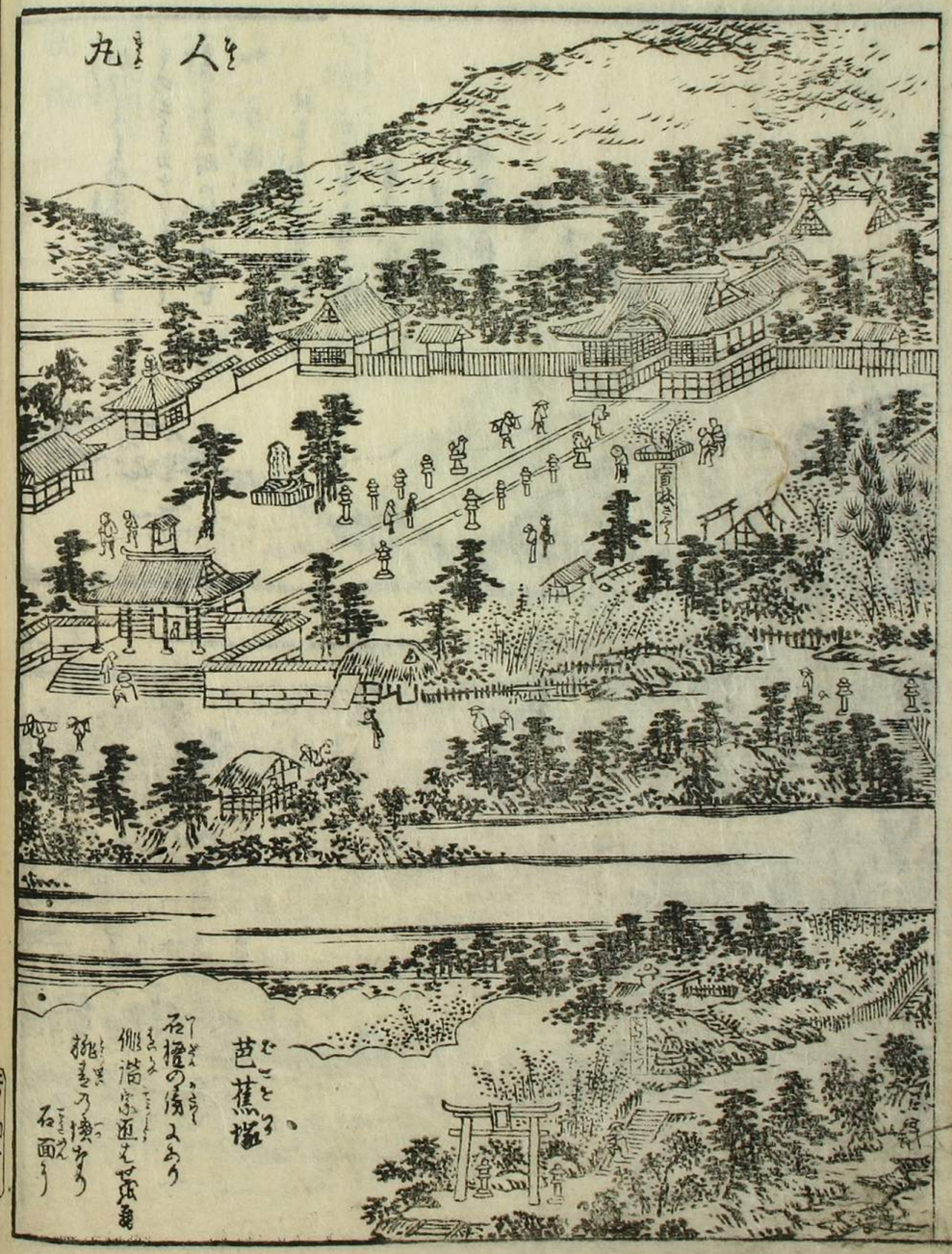
稲荷大明神

体天神

西馬川

脇塚




人丸
芭蕉塚

月照寺
人丸の塚

風俗抄に云　柿本人丸の哥は此歌上古中古末代までもおよぶ人なき哥也　顕昭注曰
夜のほのぼのとあかるといへるは夜のあくるをいへり　此浦と明石をかけたり　顕仲曰是こそ哥の姿なれ
まことにさらぬ心ありてきこえ侍るなり　たゞよそへたるはやすき事にて心得べし
されば此哥を上手の詠とはいふなり　又此哥は此道の至極にて論なく古今の第一とす

萬葉集第廿巻防人が哥に
あらしをばいかにかはせん時にこそ見へけれ舟の所にさへはいそし

ゆくさまに波の音もゆるがしあるべしおもひはるかに妻をも捨てゝしきりぬ
此二首の東歌を引て此哥を証とし、此はじめの哥は難波にてよめる哥也。人丸の歌
をかへりてそもそもよめるには、あまて此二首を引てこそ是られ歌の意大かたはかるべし。あるは此二首は
かれこれ時の景色を見てよめる哥也。たゞ人丸の心をたどりて、かれこれを比べ見るに、人丸の第一の歌は
ある所をよく見て船をこぎ出て人丸のまことに船をさしてこぎ行く所をよむ。人丸の哥のこゝろは
ありのまゝを見て浦の歌の行末を見やり、次の歌のゆくさきは行先の波の音ゆりて妻を思へるを
と思ふてきこゆるとぞ、是の人丸の船をさしてこぎ行く意に、船をさして行く所の妻
そて船をぞ思ひやれる。なるかくきこゆる縁をさしてぞおもひやるとも、此心を思ふ
の防人が哥は難波にて詠みけれども、防人のあはれなるを思ひやりて又此哥を人丸のや
うにまねびけるとよめり。されど難波より京へいそぐ心をもよめるものなれば、ことをあはせて
柿本にてよせ人丸は持統天皇の御時石見国よりのぼりて京に仕へしが文武天皇の
ころ　くだりて石見へ帰りて死せらる其間に一たび筑紫へもくだられしと見ゆ

萬葉集に見へたる是は此哥の心にはかけはなれたる浦をさして京へ
おもひよりてかへりしにも、なほ此海上の風波をもよそほひかざし行く船の心をよみて
たどるのうちにもまちて、多くの浦をめぐりて行く船の
まづはしるく見ゆる甚心をおもひやりて行く船をさしそへて
ありて浦をめぐりて行くとおもへるにつけて沖に浦の名を
おもふに只明石の浦によせて明石の浦より出て行く船を見て
浦をめぐり行く船の行く末を思ひやりて論なし源氏の松風にもいへる人を
あはれとおもひ明石浦の明けゆくをたゞよそにして物を思ふと
ある所とて物がたりにもこの歌を引けるは人丸の哥の心をとりて詠めり。
萬葉集第二　柿本朝臣人麻呂石見国に在りて死なんとする時自ら傷みて作る歌一首
鴨山の岩根しまける我をかも知らにと妹が待ちつゝあらん
　柿本朝臣人丸死る時妻依羅娘子が作る歌二首
今日今日と我待つ君は石川の貝にまじりてありといはずやも
ただにあひはあひかつましじ石川に雲立ち渡れ見つゝしのばん
同巻
○右の哥は人丸の辞世之後二首は人丸後妻のよむ哥也。○鴨山は石見国高角山の一名にや
と云。石川は高角川也。今は舟渡しあり。人丸を葬りし所なるべし。又人丸の辞世なる
いへ見んのやまと高角山の木の間よりわが振る袖を妹見つらんか　此哥は萬葉集にも出
然れどもこゝに
又諸家の命に云。氏の柿樹の下に生れし故に柿本と云ふと人丸の系図にも見えたり。

寛文年中拾遺松平日向守信之侯深と遠らず甚だ大い林道春これを撰書して其序甚長文なれば略す　銘曰

千歳模範　大義英華
詫物而感　雪月雲霞
聯枝以茂　字字之花
涌然而出　詞源水縣
絶類而優　馬生渥駮
廟祠認跡　白霧舟遮
有誰而加　冠蓋成衙

延喜式に名帳　赤羽神社　人丸社のやしろあり古社　赤羽村延喜式神名帳

赤羽の明珠の美称　所祭恐くは羽明玉

なるべし　天日槍播磨国より泊る其持来る物の中に羽明珠赤石珠

みるの玄仁記に月西美郡名もとより生る乳　○如見社本松寺

明石浦　郡中海道の地名なり　明石潟　潟い海道の儀　明石海　明石灘　明石渡

明石迫門　迫門い海路しのるせいきの変　明石泊　明石里　明石驛

万葉集　月まさせば赤石の浦よりけるを出ぬる妹うらぶれ　門部王

拾遺　夜ふけぬ明石の浦の松原い波とともにのこるとまるを　為憲

後撰集　なのりそ潟あまた苫屋の烟より志びしまとうる秋の夜の月　帰徳院

名集　明かりてあかしの海の秋風ふけ波ぞ立さまたる　中務

とり出のなりしの瀬より入日うつる清きうみ乳のあうみ　人丸

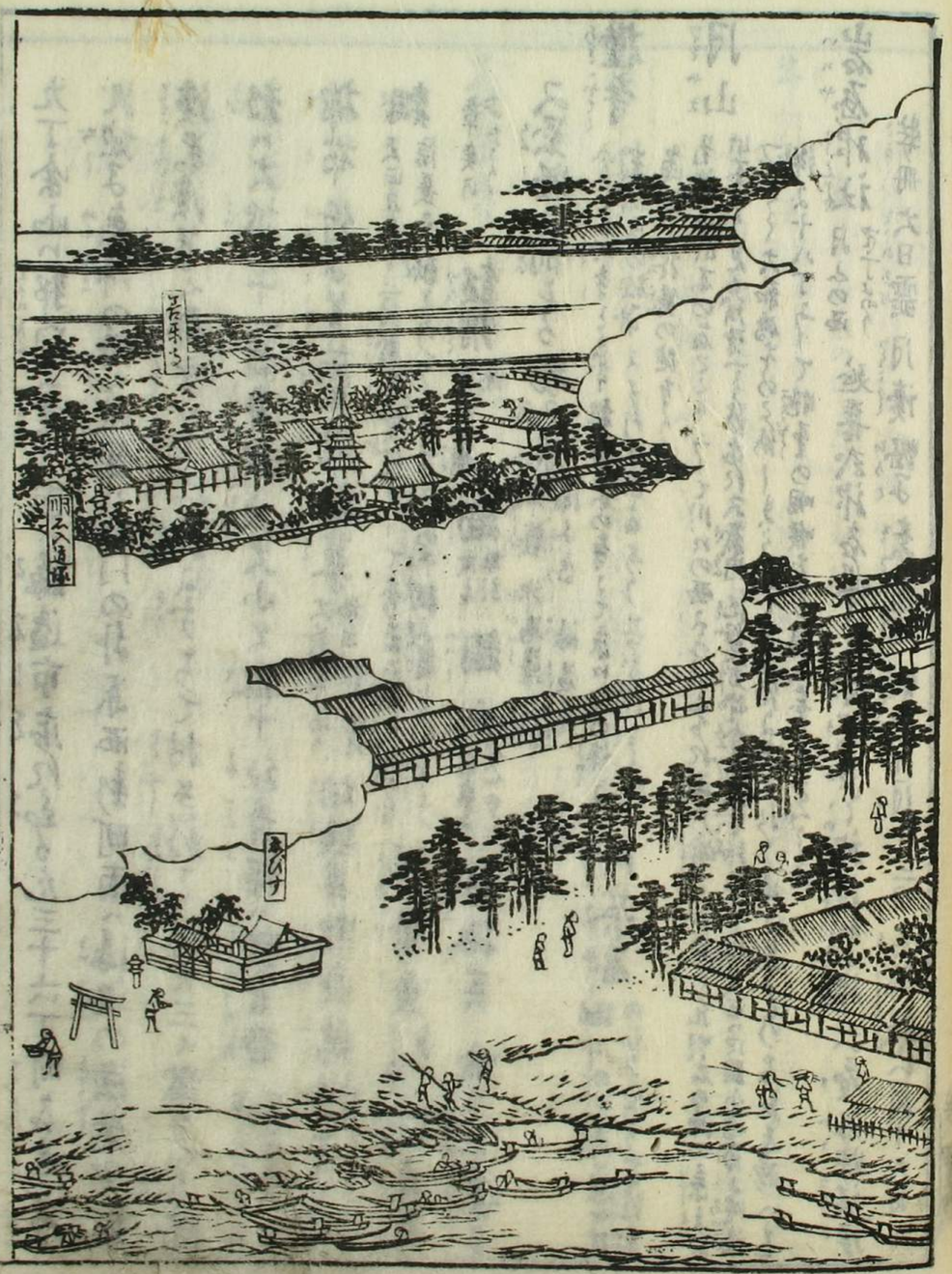
夜をこめて明石のせとに漕出れい遥に海くるさとしらの雪　後恵法師

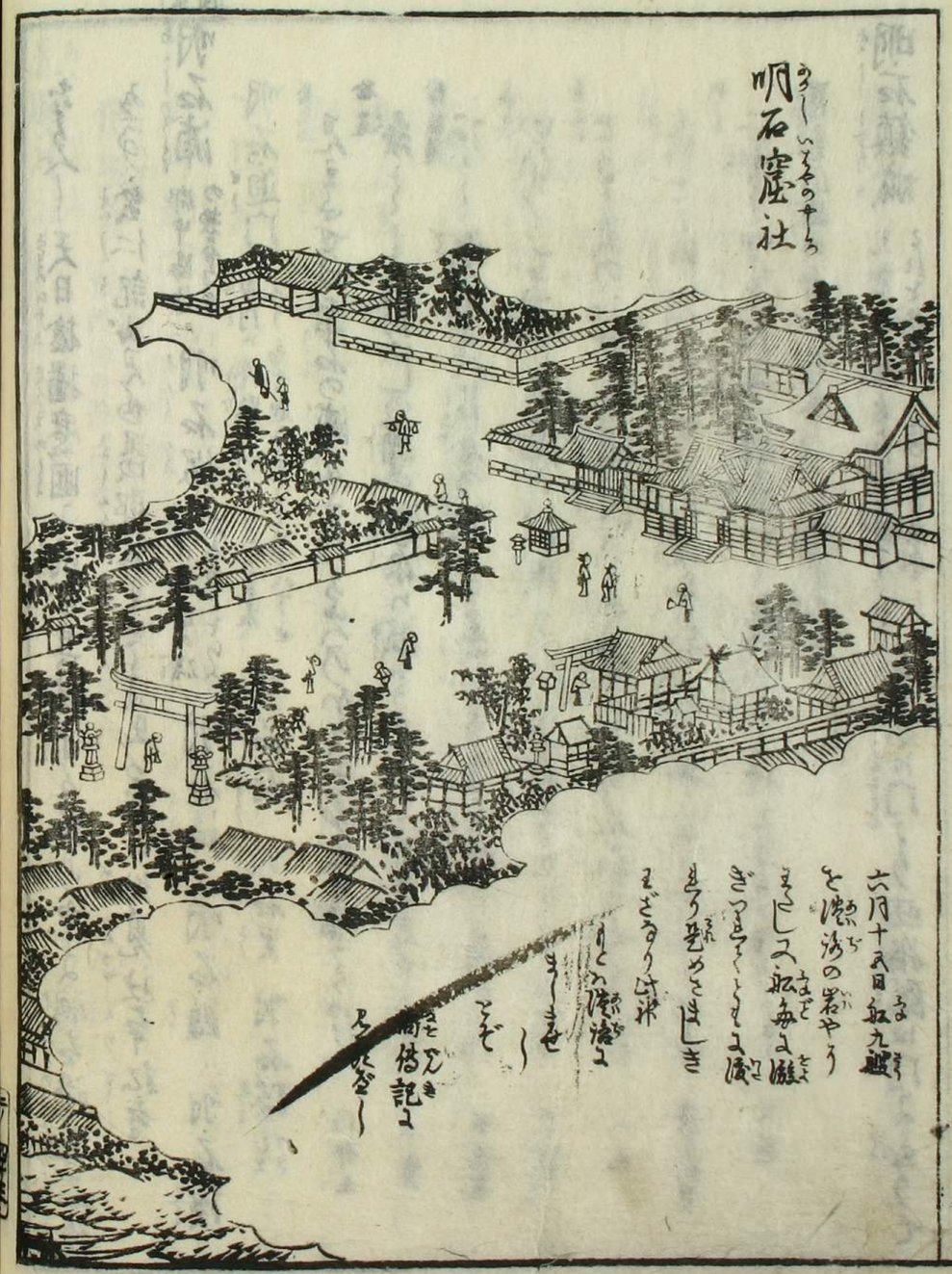
新古　二ちとせを出明潟いく夜なりぬとまりうらうら　又通

皆是明潟の事　なのりそ潟多し

明石鎮城　元和の頃小笠原右近太夫藩　人丸の祠あり　赤石に門より西振路に門より西

名所




明石宮社

九丁余小い郭門より連り南い海道市店に成る凡三十六丁所石垣より陸
に地子免許の地と此餘い西門の外東西新所南い海辺の漁者所新
濱新濱名と郡中い十六庄より村邑名と百廿三之濱下の浦
数い大抵二十一箇寺祈社大小大抵十社産物い鰒米麦
棉布竹子笠藁席穂蓼大麦苦菜 焙煙具 酒壺 編笠 今の世ゆ食
鯛 天正九年十二月厳島紙〻て奉る右之協州紙の外
信長公へ献上のうちよりしの千鯛より箇上るうち 鰹 章魚 海藻花
章魚の ぶたこん 飯蛸 あらひ蛸 編 武る 塩引 鰯 凡任言白 楊梅実 城下干菓子
又器物之制とる物又不平蕨 祈馬藻 海藻花
撞寺 今い光明寺と云ふ新寺家の寺とて系に門の傳之
光源氏の故ありと云ふ古あり其系譜うに 御茶屋 城川の東南に家や敷
当城を拵る地なり のむらより甚近系
当城を拵る地なり
月山 光近年此所の名ところ有て川に西之
此所より見る分外一区あり又義内紀伊新抑金剛山生弱い雲の横人西に区国小浦南之浦浦
繋之十八丁ありて嶮峻の咽喉なり 張人志きくるべし
岩屋祈社 月山の西 延喜式祈名帳之云 弥賀麦祈社 祈社 六座 伊特諸伊
特冊 大日霊 月濱 蛭子 素盞嗚 例祭九月十三日 名帳 六月十五日

御舞祭二月十三日 御湯正月八日城主より献之
○舊記に寿永の頃之比祈宮い嘉吉和坂の合戦之矢さうかう之後紀あり
牛頭天王 岩屋の社郭外之あり 祈社 宮 いとく 廣峯 或之神名明石の浦之
六座の内なり
法ありて廣峯之移〻 なるとも義之新系と称て平安城東方祇園之
祇園荒明勅諚ありしとて社とかく
竜王山長林寺 岩屋の社の 本寺 薬師如来 後系宗合明石郡之
勅願寺創 建る七佛薬師の内之 元正帝の
岩楽寺 号法写山西の地門 東 春山寺天台宗
ふ之恵心の作の
より南へ三丁ばかり 開基法道仙人 本寺 地蔵菩薩
地蔵ハ今寺中
実相院とあり 保元元年平清盛播磨守より 附諸堂寺院と再建
たる寺 銭五百貫を寄附を養和二年寺僧名清盛が孫又倫乃
石塔を建て供養之今之扣ひ 不経寺門の内之明石入道の墓
附記 清氏物語明石巻大意
播磨の新乃守そなりし明石入道
ゆ之日のと世のひら巻て其志と捨て入道しなんとをまく明石乃浦
より濱のうち図へのがちなるべて住やうに光源氏の女

明石のとうつよ入るいさまり書ひて一つの歌ひと後者の神よりけで歌ことをかく
世の亀いさちうしくも山むをいろ紅人よりうんりゝ歌ひるる民歌いまき
さたぐちねとさば海と外とるげと送こしてありつるふ打ふし源氏源ようと
さをゝへまして雷拝びさしくひらあ紅雨風まげしきの日民ゝありて後と
雷廊よ拝ちゝ主又源氏の御父帝の霊義よ日人後ひ山源ようをちやく
うちさんしくの書げあり明石にも後者の神の告ゑどんようて源ようへ源氏と
逆ひの松よそひて敵義の告ゑと義ゝろひ後さんして新しき
者に入人つまゝ入るのうちへ入せ後ふムちのつゝよいちめしき堂を立ゝ三縁と
紅ひ山世のまうけよい秋の田のゝとあり拝さら稲倉をゝ立てゝありめうう
頼山ろうたう海よ拝びてむとろうぐもい園部のやうさよ後り居うう源氏い新うう
御車よを入せ後ひぬをは入るの方みは月日の光りをはうる心ちよ拝うるあの
さまをばゝ紅ゝいびつうしうる心ぞ人ゆ立ゝく石茶載ゑどのゑ一ゝ
ゝ敷入口の水ゑど後御いかきひぶまゝと月西入るゝ親習ひきゑゝし心あ山ゝ
めでらを後よ女と拝せ奇嬢う後人へいぶせても心よ物とうやむうるやうやいう
ゑと周ゝ入ゑるゝ いうしうゝ 拝りふらんゝ後のうぐややよいうふまゝゝぬ
人の字うるやまん 山後日ひうて八月十三日よ園べのむゝろのうさう富よ
ゝまうりたまひてゝろろふうきゝまうる紙ゝぐゝたゝちきゝせたうひぬ
山のう七月廿日あまう御海の宣下ゝうる小ひうゝのとい六月ゝうう

さびしきぬ身となれば帰京の後むかへまゐらんとすぐなぐさめ給ひかへさまに琴をのこして
あかしのうらをさりてのちなくなくひとりすみつきけるまゝ孫をやかけて源氏の卿に
までのかへさにみちすがら中の緒の音もへだてゝいかにかなしからまし入道といへる人こゝに
も猿のそうぞくあるにより源氏も此所に訓る物のごとくかくてこれのにしたまへりと云

無量光寺

月浦山と号す善楽寺の南にあり本尊阿弥陀仏 紹泉院末 光源氏月を
弄びたるの地なりとて月見寺ともいふ又南に源氏屋敷月見の松などあり

海士男狭磯塚

月見の松とならびて一株の松あり
是むかしの塚のしるしとぞ

惣門

城下西の口姫路口より入る門同南の北の
及び善楽寺海士塚の北は松本村

明石川

城門の外にあり川中二丁余ちかく
源は三木郡より出でゝ衣川二鉢の森にあり

皇王村

明石川より西の磯に長き町にて西新町よりの王子権現は村の小森の中にあり
此皇子村といふは日本紀顕宗天皇の紀に合せてしるしたり其国郡を云

人皇十八代履中天皇の御孫市辺押磐皇子の子億計弘計の御兄弟
は父市辺皇子の雄略帝に討れ給ひしより億計弘計兄弟とも
に禍の身に及ぶ事を恐れ給ひ共に丹波余社郡に遁れ隠れ給ふ
日下部連使主といふ者は遂に播磨国縮見の石室に入りて縊れ死しける
億計弘計は此使主が子吾田彦を従へ給ひ明石郡に来て縮見の屯
倉の首に仕へて使はれ給ひて伊予来目部の小楯といふ者郡県を

巡行して相収穀の折から縮見にて新室の饗酒の時御兄弟に燭
を秉しめられ夜深く酒酣にして舞を極して皇子よりもへ御
兄弟に舞をすゝむ叢嘆ありて辞して給ひ弘計衣帯を解き室寿の
ことを誦ひ立て舞給ふ其歌に曰

○出雲は新墾新墾の十握稲の穂を浅甕に醸める酒
美飲喫哉 中略 ○石上振の神榲本伐末截於市辺宮天下治万国
押磐尊の御裔の僕是なり

是を聞て小楯大に驚き席を離れて再拝し即郡民を宮を造
して安置せしむ即状を以て清寧天皇に奏聞せしめらる清寧天皇大に歓ばせ
給ひて遂に明石に迎へ奉り後に顕宗天皇と申は弘計
王是也仁賢天皇と申は億計王の事也億計弘計其子
しろし仁恵徳政の帝にて百姓の憂苦を
知りて今に村の名に皇子とのこり

船上城址

里俗は不をふるしろといふ
昔は山名道幸の居城にして後蜂須賀家政高知の天正
の頃には三木長治の家老居る秀吉に三木表の附城として
甲斐守長政の守らしむ慶長年中池田輝政家老若光出羽守居る元和中

明石川（あかしがわ）

小笠原忠政居る元和又年間郡城城あり忠政豆州これを居る毛利
秀ひろ以城堅るとゝり秀ひろ池田出羽守をして居る舟形より水門を開きて
松と通りたる所の標石門に今尚あり毛と右波戸とゝり元和小笠原忠
の時今の明石の城と移れる云後寛永年間十二巻嘉右元年赤松退城り有之
明石松上の城郭と構ふゝは毛ゝや

龍燈山観音寺密蔵院　松上村　真言宗浅草寺末寺　本尊観世音

年代不詳二佛中間に大寺師地蔵菩薩観音と安置仏来播磨の一大
刹之末寺寺家数あり

山王社　密蔵院の　山王山王日枝之ゝり

林村　松上の西よりくは村宮義寺編記之義之系統あり　日城跡　三本り幕下大屋
松浦村と名つく今村と称を居もこれ有り　九月武功あり　肥後守居る天正の

賓蔵寺　真言宗　昆沙門正月三日開帳　上宮神社　林村より北丁上の丘にあり近郷
海川ゝ寄れ本寺　北ケ村の氏神之事龍又社大明神と
称仏延喜式神名帳林神社ゝゝ

鹿ケ沙漠　林浦より西小豆島を海中十八里の間の海流より其西脇い見浦く見沙漠
の強りて麻の脊のごき所之名付ゝる名付ゝ　大松ゝ見たまく
の強りて麻の脊のごき所之名付ゝる名付ゝ　大松ゝ見たまく
ゝ有りけ駕くゝ有もあり之れ共も石にたるゝ見ゝ安くて過ゝ有之

宝珠山十輪寺　地蔵院　真言宗　松上密蔵院の末寺ゝり　本尊薬師如来。昭五日光十二神あり
明石郡之七佛薬師を建ゝ外之此寺の一神と造る因て世之八神薬師ゝゝ里俗法
く養麦ゝ粉を以て供ゝ

和坂村　王子村札場ゝゝ丁余ゝて此ゝ俗間ゝ也ゝて何ゝ
ゝゝしの俗い荊条ゝの小藤条ゝ
右ゝ山い荊条ゝの小藤条ゝ
左右のゝを狐荷山鹿鍋ゝゝいて住素ゝ
嘉吉軍記之和坂合戦い摂戸後素
ゝあゝて条郡鍋ゝて此嘉山鹿
小之赤松常陸ゝ則尚和坂の構之ゝ

赤石　林村松江村との間　汀と云ゝ七八里之大さ仏又天仏方之甚名甚赤
ゝ海中ゝ　三月三日ゝ満ゝゝ
ゝ船ゝ船ゝ之ゝ出ゝ
水上に船ゝ船ゝ船ゝ
ゝ石ゝゝ船ゝ船ゝ
ゝ石ゝゝ船ゝ船ゝ

慶命山坂上寺　鱶ゝ坂に右の丘之　本尊地蔵菩薩　祖師堂　弘法大師
女の

坂吉城跡　吉田村　○下津橋城跡　東　朝霧陶器　若中谷村之浅ゝ面西仏甚
浦雅之今ゝ仏遠物ゝ仏人松宝仏

松江　東西二村　此浜之麺と揚ゝて其味腸ゝ　ゝ仏ゝ多ゝ之ゝ仏ゝ浦之名ゝ
て有名ゝして此ゝ名ゝ　ゝ麺ゝ名ゝ

大久保譲　大義ゝ寺ゝ義ゝ繼ゝ　大岡松　大久保光福寺之　大岡寺庫の法ゝ　墨石明神　金毘羅村ゝ
加古訳之ゝ　村の氏神ゝ仏墨石と称

和坂
慶命山坂上寺
弘法大師
寺創建三月七日
廿一日十五日開帳あり
宝永の比の再建なり
當那先生書附り

清水里　長渚浜の西にあり　尚國又信濃

夫木　押なべて清みの里にあれば外にぞ生るる　常陸

清み川　中の郡の内にあり下流なり　宮ゐ　清水の里の西に流る名あり清流

藤江浦　松江の西にあり　但し上古は入江なりしなり　今は石不見　今は民家の居地となり　黍の幸　夏は麺狭き玉金奚と採り又物　絶　幸奚壺と制を和名抄に石那菖蒲の殺多あり

平記に藤江の離と見へたり　古今殺多あり

万葉三　いなびの浦にあまとりけつるあまとりにん　猟船　人丸

江井ヶ島　八木より西西海東海と云　今西江井東江井と二村あり　郷人相伝へて云ふ　昔村の西海にて釋の紡基の築く所なり　今は石本なれども又八木村より此海岸に築き築き立曲れり　屏風の如し　故に屏風が浦とも云ふ　汀を去る一丁許に水　夢に漁磯あり名付て海鳥と云ふ　又七里乃岬とも云ふ　老い兵庫の海より七里毎に庵に漁磯あり　老其一に其磯の中に馬石と唱る拍子飛ち馬　両海の村にしるる風湾の喜を免る若紡基に築くの初め六月　如月に漁法と佐養に老い汀満に生海鼠　神馬藻と名く採る

○江井より上と云ふ地名なしもあり由井より上を通ると云ふ古名なるべし

魚住泊　人丸　東海西海中尾浜谷　西國みなと奚住の奚と云　若紡基の築く泊乃濱なりつ今い埋て里

民の居地となる尚若奚江井海鳴なつ

本朝文粋　一重請修復播磨國魚住泊事

右臣伏見山陽西海南海三道舟船海行之程自擢生泊至韓泊一日行自韓泊至奥住泊一日行自魚住泊至大輪田泊一日行自大輪田泊至河尻一日行

此皆行基菩薩計程所建置也而今公家唯修造輪田泊長廢魚住泊由是公私舟船一日一夜之内兼行自韓泊指輪田泊至于冬月風急暗夜星稀不知舳艫之前後無辨濵岸之遠近落帆棄檝居愁漂没由是毎年舟之蕩覆者漸過百艘人之没死者非唯千人中略今修造件泊其料物充給播磨備前両國正税冀也早降聖朝援手之仁令脱天民為魚之歎凡歟便宜具載去延喜元年所獻意見之中不更重陳

延喜十四年四月廿八日　従四位上行式部大輔臣三善朝臣清行上封事

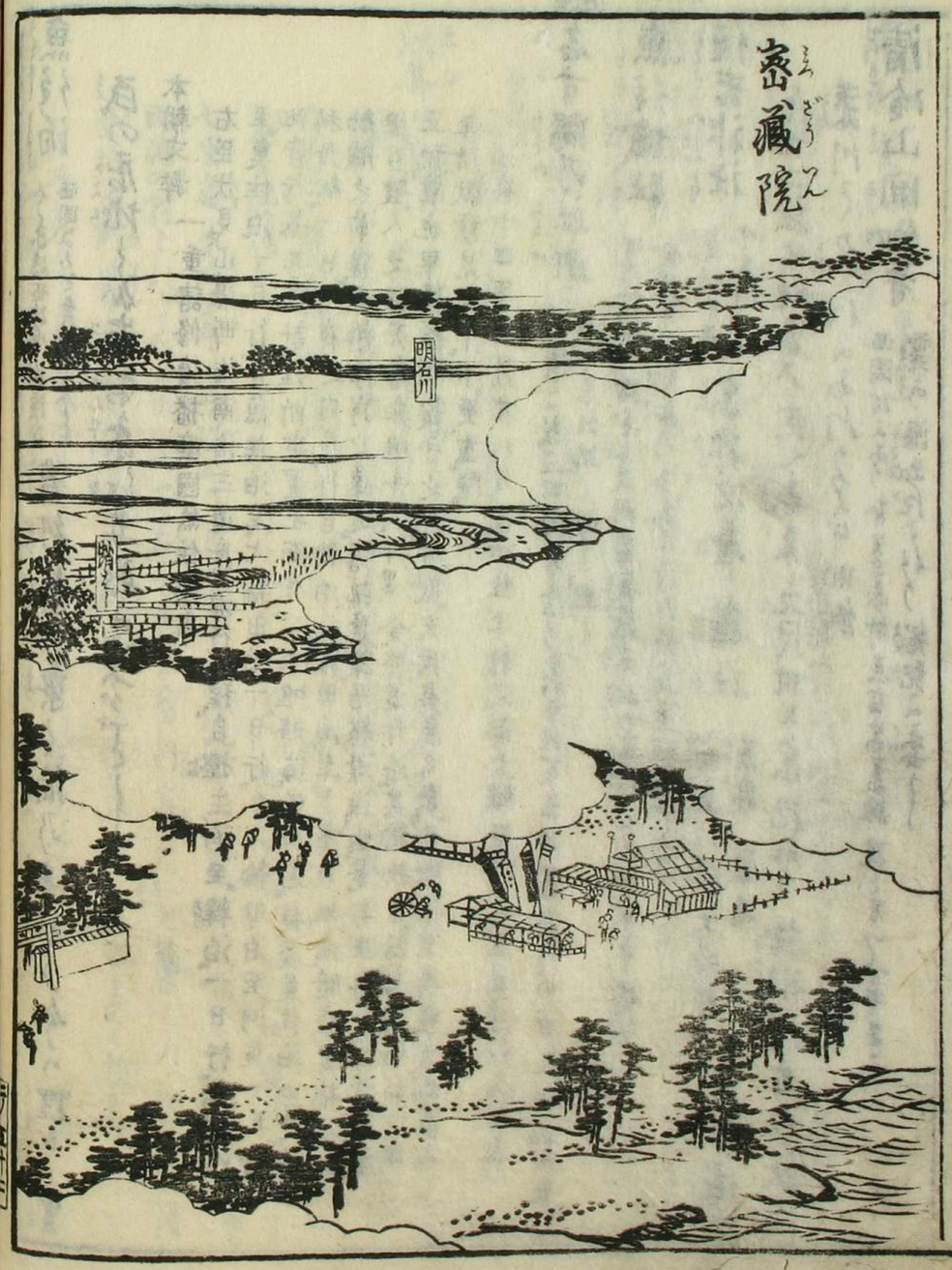
名寸隅乃松濱　名寸隅の歌三に首見えたり其さは不審若奚住の名は松濱の名も

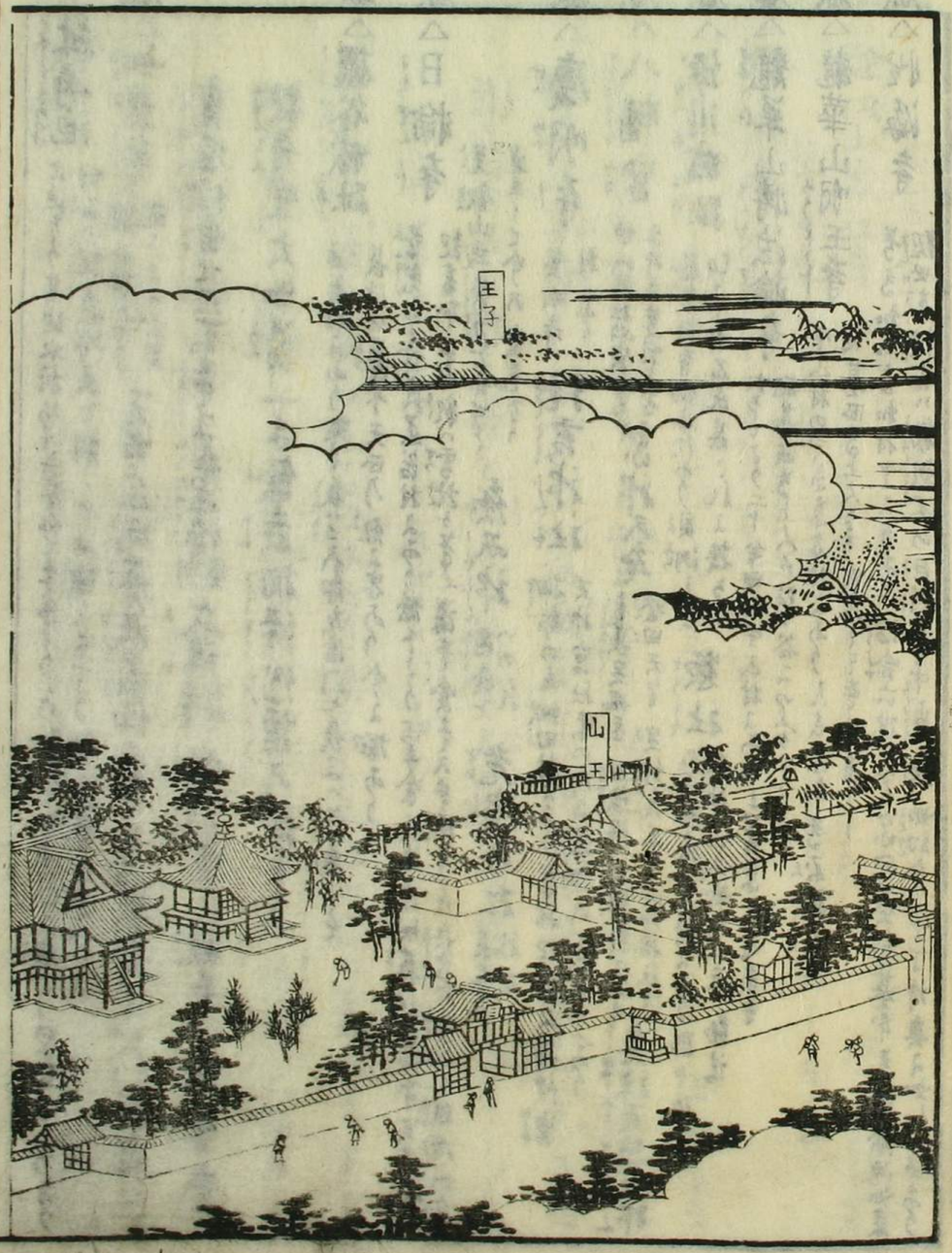
魚住城趾　西海村あり城を築き利家長絶赤松の幕下之文永年中祝部　合戦の砦則結乃ち初め後奚住武功あり

住吉神社　奚住の庄　中屋村　祭神住吉　摂社　高良　八幡　大海神　荒神　巌島　老之浦分

東廿二社の住吉乃内之毎年九月廿日祭礼あり　摂州住吉乃社人

兼門さくあり村のあり　西國村のあり　本文言宗寺院　隆　清冷山開伽寺　霊あり　源出　祭礼の奉安


寄藏院
明石川


王子

△林崎池 大池なり其池水利ふし…を引て助用人に益ある…の大なるものなり
明石の城岩殿碑表と刻して池讃に立てり卯文集に見へたり

△如意寺 櫨谷村にあり 城下より二里 天台宗開基法道仙人本尊は地蔵山門 鐘楼 三
重塔 坊舎北に不動堂 子安堂 文殊 常行堂 三昧堂 護摩堂
観音堂 大伽藍 一千余歳相続仕る地なり

△櫨谷城址 池谷村にあり城主衣笠又郎花隆門之長子の範景なり
長治の幕下天正乃乱に忠あり今は塚あり

△日輪寺 池谷村にあり城下より一里余 天台宗開基法道仙人本尊は千手
観音 … 寺 …
光叡山恵亮の力を合せて
建立して今の堂是なり

△慶明寺 慶明寺 住吉神社 疱瘡の神 疱瘡と いのれ 老室乃松 長寿と 祈る
村にあり

△八幡宮 世人又社の宮と云 押部の谷細田村にあり 天神宮社家の川に渡洲の山石とつくあり
平持氏某明石の家神又庭 気長足姫尊 玉依姫 誉田天皇 足仲彦天皇 大鷦鷯天皇 此外摂社是 奥社天照大神

△伊川城址 吉谷村寺畑山にあり 貝淵にて
もと明石氏某これに拠る

△龍華山満法輪寺 布施畑より二十余町 小中山村にあり 真言宗開基
関基西尊上人多坊が谷にのこれり

△龍華山明王寺 中山村のつき末名村にあり 真言宗本尊不動明王
開基西尊上人より両院とも寺宝多し

△性海寺 和名和村中にあり 坊舎六院真言宗開基行基本尊阿弥陀如来
観世音 維古い 勅… 末の巨刹にて中興 秋如如の弟なり

△近江山近江寺 性海寺より一里許 真言宗開基法道仙人本尊観世音
弘法大師の乳木不動十六羅漢其外什物多し
近江の國 … 再建して今近郷より群集る
後の小堂を今僧坊十二院有院室寺の宝として数多し。
社 道場権現 田村

△雄子尾雌子尾 三本より三里 巽の方にあり
西山東西に雙立て登る事またば丁斗雄子尾元として立樹ある
く小祠帝釈天を祭る毎歳九月十日山に鼎あり西の方雌子
尾には峰鬱々と繋りて小祠巌重にあり祠前に舞臺あり素盞嗚
尊稲田姫乃御夫婦を祠まつり傍人大己貴命此に降臨ましく
一百八十一神を産給ひし故神出乃名ありとそ又其の余
はまく倚に陽石陰石の形あり陰石は屈曲の石の裏なる其石
間をのぞから窪くして陽石になどよく似たり又陽石は大抵二尺
許に立る是を縄にて巻き結んで遊りしとかんえ
より近郷の俗多く是を崇して殊に婚姻を祈者多し

△最明寺 雌子尾の下にあり 鎌倉山と号れ 開基法道仙人之 普桐模寺 時頼入道諸國巡行

雄子尾
雌子尾

性海寺
長谷寺

近江寺
性海寺
如意寺

の時諸堂衛舎附属を編せし坊舎七十余宇の大刹なりしが應仁の乱に天正の兵火に回禄して今わづかの一宇を残せり真言宗ふして高野に属す庭中に時わすれ遠剣の梅といふあり

△泳出城跡　此所手尾の下西にあり城主赤松の一族にて建武の比より将軍家に属して京合戦又神南山の戦ひにも武功あり天正の乱に亡ぶ

△野中清水　郡思出道のうちにあり　印南の東にあり　此所の清水村より北に又丁余小野中村に森あり林の中三間計琵琶の形に似りて今も湧出て清水川へながれ海へ達す　是播州十水の第一なりと世にこれを賞す

播州赤松上総介則房雑談に十水を定めし條

小野江清水　姫路き所の細流也　笹井清水　揖西郡香浦村　星田若清水　餝東郡星田大山浦村の内小名清水

花垣清水　揖西郡觚部　小野清水　揖西郡平井　御所清水　揖西郡田寺村辺椿が谷　桜井清水　佐用郡舟坂

揖西郡香浦　野中清水　明石郡　井口清水　印南郡井口村　落葉清水

又其家に義を示の沽券あり

一当国十水のうちハ名水に絶えるうへ人ハ其村の長心を付撰り汲て送せましきうちに水寺に月毎に一升の扶助りし給ふ来る年々十俵をたまひて第一付家也

文亀三年二月　志水甲斐守

此清水之山の内也歴城無して撰発物捨中同发若也　今弥之よりさらくるれたは

月日

古今　いにしへの野中の清水ぬるけれど本の心を知る人ぞ汲む

ぬるけれどつひしハ濁りて水のぬるくなりうつるされども元のさ知心ハ本よりぬる人の心に存ねるぞ人情のさまのよせくるを云ふ汲むハ撰集の心なり

和歌にいへるよし古実しなるとはいへども当大古古今の歌の意に照らしても時ぶに当るは撫へりぬとハ出るへさりたりれ其いういへりしたり此余撰集の古歌数多あり略す又蜆岩酒詩序あり文集にみえたり

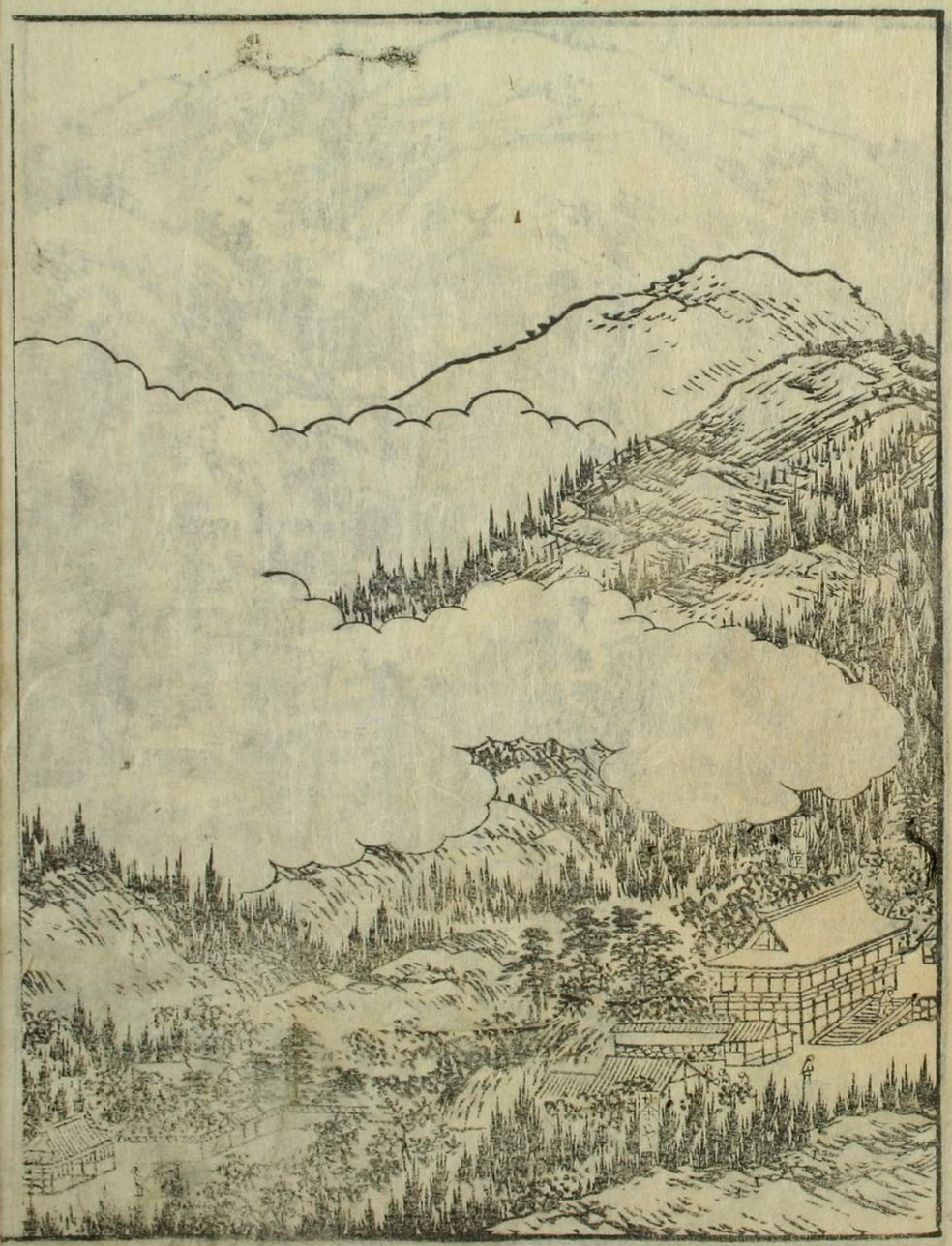
山家集

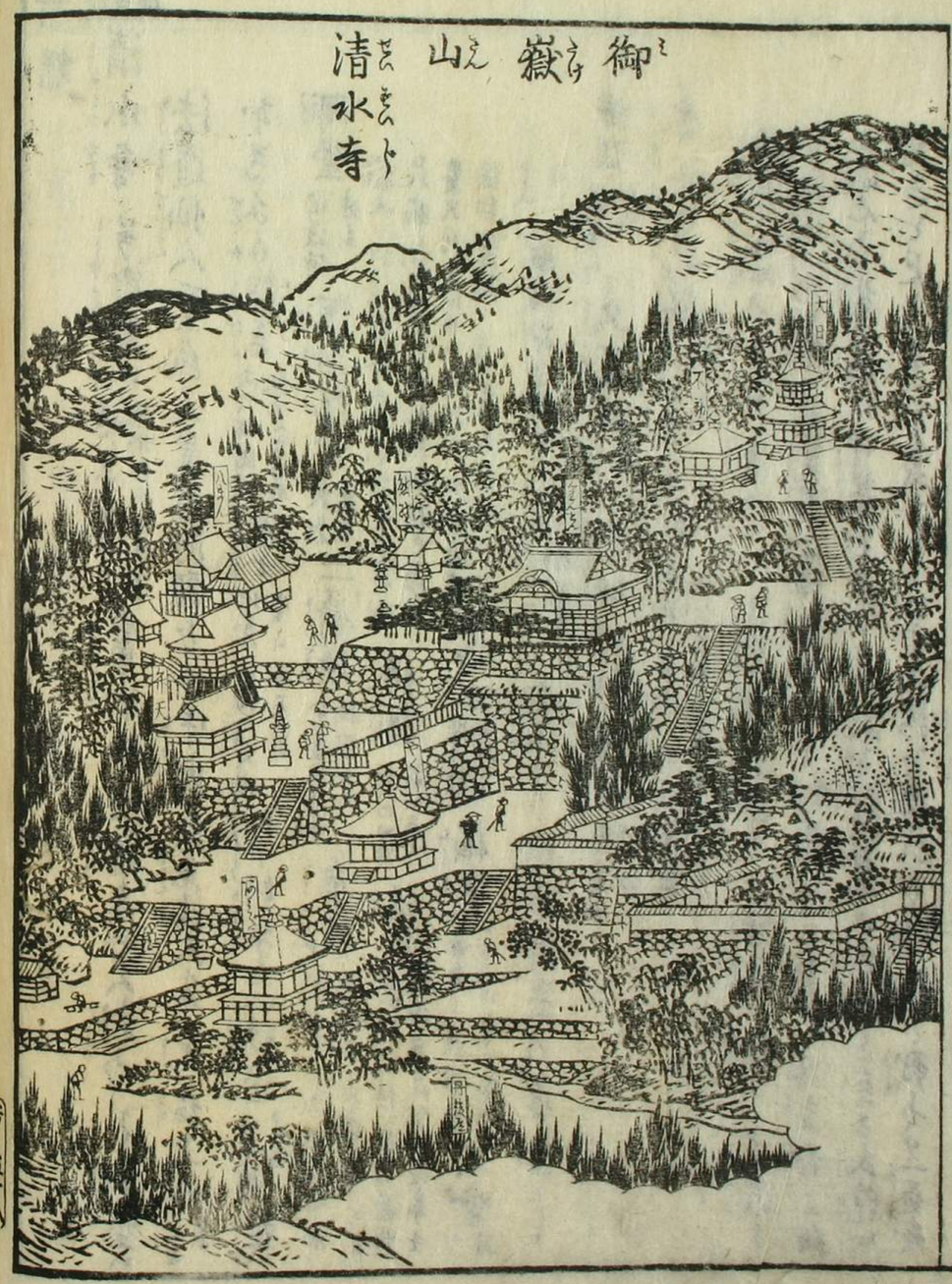
さりまの書写へ参りかりて野中の清水を見んとしけるに一むかしのかうりもかはらず年経ても修行をさへ通りけるは

むかし見し野中の清水かはらねば我かげをもや思ひ出らん　西行

清水の林の中に祖父松祖母松夜啼松の名木三株あり中にも夜啼松の其ハ枝の茂るぞわけづりて幼児の見るれば夜なきをとどむといへり

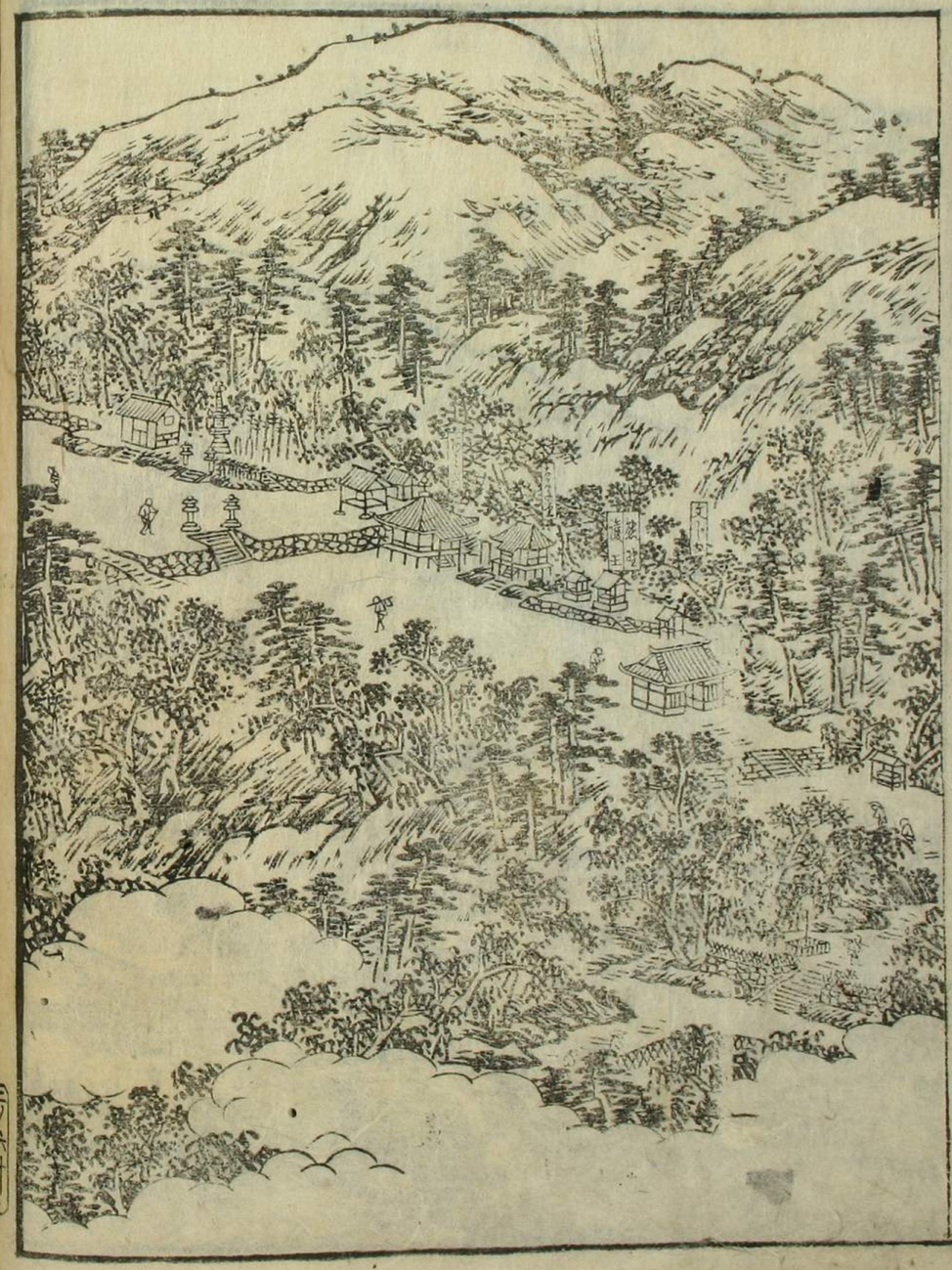
清水寺　号御嶽山　摂丹州丹州の境なり　當山い千有餘年の大刹にして開基い
法道仙人聖武天皇の御願なり中頃ハ寛治又年光名上人天台宗
なるなり　観音　六十六所巡礼第廿五番　服士地蔵　毘沙門大講堂ハ安置ス　常行堂三昧堂　後白河建立　藥
師堂　池禅師建立　阿弥陀堂　執行建立　二層塔　かなる阿弥陀　祇園女御　奥院　中なる十一面　摂右帝御
願道年兵建立なり　達摩也。御法名仏。地蔵菩薩。　達摩　奥の院の右なり　諸日　奉鎮　摂陸　摂丹播州
八幡。不動。文殊。松尾明神。松と絵図　清水寺文明十巳年壬
童子月十巳日午時紀行　祇園長吏　法印賢精　大工　長示宗次　清水塔の後　福富　毎年二月初午　大會六月
十八日　西坂　中すり十八丁　一丁毎ニ標石あり　崎山より諸方往来乃石多し
西坂　法華ハ　久米坂　明石乃石　中坂　中山寺有馬乃石　丹波坂　来の乃
赤松氏龍墓　丹波坂の侍の子　日男　氏春　家則　祐春　秀則　役兵百余人ハ中と創寺ス
氏龍い南心乃まえ大勇ハ　力量勝る又波ハて諸兄と睦じ
く忠臣二心と抱く民官軍ハ帰順ハて足利義詮と美る真良帝ハ新
田ハんぐ義の関白師基とき心ハ討古地の兵敗走ス氏龍曰
危きと見て云い不義ハ二十又誅と率ひく師基と戦ハ少一屋敷




御嶽山
清水寺

光明山

光明寺



所の数ケ所の城を築り来りて摂磨を帰し義澄を落る後清水を戦ひ
自殺年廿七十七歳士俗義民郡今村又郎ヶ丘若丸を捕けて殺事
及ぶる

三草山古戦場 法ヶ乃南三草村の東より十里ヶ谷と云ふ 平家物語一谷の合戦の時源義経一万余騎磨堀越より出り丹波摂磨の境三草山に陣を取平家は小松資盛有盛師盛三千余騎三草山の西の陣を取源氏の大将蒲冠者範頼は東の方に向ひ小松殿の陣家放火し西の山に向とあげたれば平家の陣い周章騒きたるを源氏寄せ合て追落暫時の内百余人を討取平家の大将資盛有盛忠房い面目を失ひ逃ぬ

八流人まつり 上三草下三草の間

三草川 上三草下三草の間 うあり

瀧野川 瀧野村にあり 加古川の水上 川の東を瀧野町と云ひ西を瀧野と云都倉乃地にて瀧

品変易変し町のまを舟流し あり川中川岸に巌石多く流れ激し

日を流るゝ瀑布のごとし白波雲のごとく立て水声霧し 筏い為

縄を解き一本を流し下流にて又筏を拵ひ弥生の比より年貢多く

のぼり急流に折るゝ岩に当る多く散乱す古歌に似うり 渓蒼苔

と採る暫時に数万と成春日遠近の猟客貴賤老幼貴賤花宴乃境

となる

光明寺 ふくの峯にあつる 又峯山ふくの生言寺 開基法道仙人 本尊十一面観音 文殊堂 地蔵堂

鎮守護摩山 鎮守 二王門 鐘堂 経蔵 僧坊 十王堂 大慈院 名僧大師の

自画の像あり 諸人参る

光明寺陣屋 光明寺にあり 観音の比 刑部氏と舎弟直義と 瀧雅 あり 直義寄る

初代して来る氏兵庫へ居りぬ 刑部氏に尾ヶ に陣を構へ家臣高師直 尾ヶ に居て合戦 ぬ

瀧野古城 上瀧野にあり 赤松氏重の子政資の居城 七条家の末裔 ぬ

明應年中の人なり今 細川 ありて 尾ヶ

鳴尾山 瀧野より加西郡へ 引尾山 光明寺より加西郡へ 城 ある